

新定女子國文 卷一

3759  
Y019  
資料室



42244

教科書文庫

4
810
42-1928
200030
1548

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

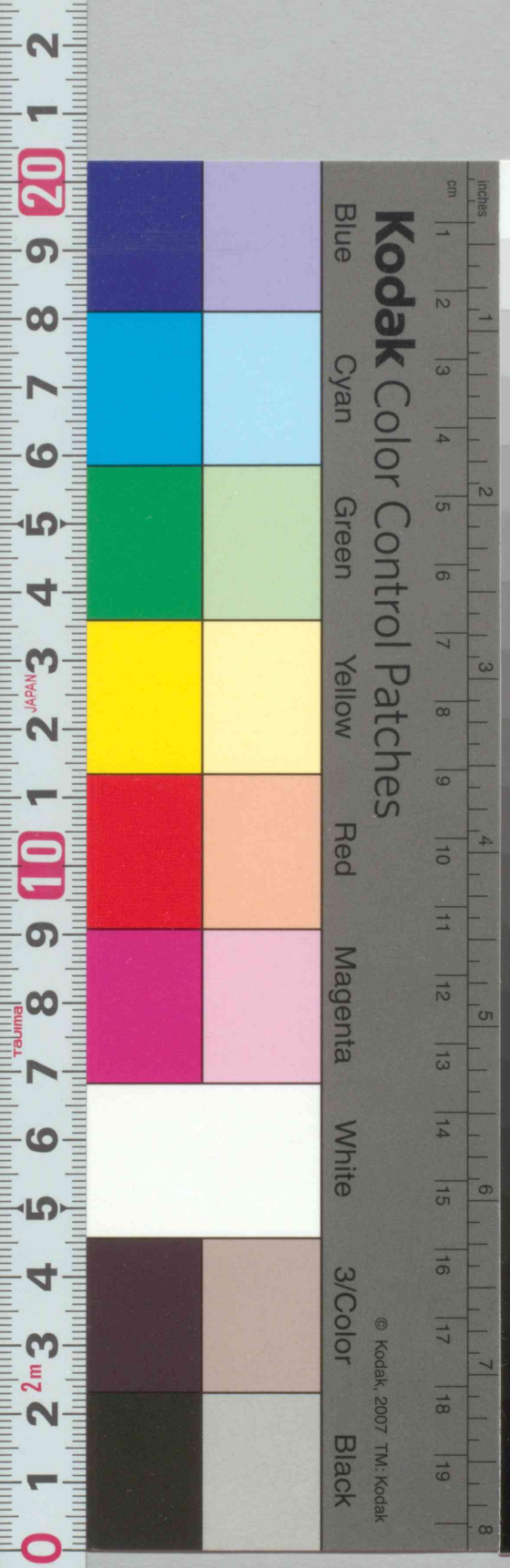


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak





資料室

375.9  
Y019

日二月二年三和昭  
濟定檢省部文

吉田彌平編

新定女子國文 卷一

金港堂書籍株式會社





新定女子國文卷一

目次

一	御幼少時の皇后陛下……………	馬上孝太郎……………一
二	飛行機……………	久米正雄……………二
三	最後まで……………	土岐善麿……………三
四	狗ころ……………	二葉亭四迷……………四
五	大原女……………	……………五
六	深山の鳥……………	高濱虚子……………四
七	角笛の響……………	吉江孤雁……………四

目次

一



八	雀	北原白秋	三
九	幼き日のうた	葛原 齒	六
一〇	良寛上人と馬	島崎藤村	七
一一	目標		七
一二	働く料簡	和田萬吉	八
一三	猫	夏目漱石	九
一四	町の樹	上原敬二	九
一五	夏休の一週間		九
一六	一兩損の裁判	大町桂月	一〇
一七	明治天皇の御遺物	笠井信一	一〇
一八	母に	八波則吉	一八
一九	乃木大將夫人		二三

二〇	蜻蛉	志賀直哉	一三〇
二一	秋分	徳富健次郎	一三三
二二	海の上より	水上瀧太郎	一三五
二三	芙蓉の花	西條八十	一三九
二四	保昌と袴垂	萩野由之	一四一
二五	箱根路	正岡子規	一四四
二六	富士の裾野	若山牧水	一四五
二七	まことの愛	柳澤淇園	一五九
二八	蜘蛛と蠅	坪内逍遙	一六一





皇后陛下  
 良子女王  
 久邇宮邦彦王の  
 御長女  
 明治三十六年御  
 誕生  
 大正十三年御成  
 婚  
 馬上孝太郎  
 教育家  
 前女子學習院教  
 授  
 東京高等師範學  
 校教授

# 新定女子國文卷一

## 一 御幼少時の皇后陛下

馬上孝太郎

恐多いこととございますが、私は嘗て皇后陛下の女子學習院御在學中御奉仕申し上げましたので、當時の事を想ひ起して、こゝに御學習の御模様その他につき一つ二つ御話し申上げようと存じます。

陛下御幼少の折は女子學習院の幼稚園へ折節御通ひ遊ばされ、明治四十二年四月から同院小學科へ、大正四年三月御



卒業、直ちに中學科に御進み遊ばされ、同八年三月中學科第  
四學年を御修了のすこし前に御退學遊ばされたので、女子  
學習院には十二年の間御在學遊ばされたわけでございます。

幼稚園並びに小學科の初年ごろは、女子學習院は學習院女  
學部と申しまして、院長はあの謹嚴な乃木大將で、一體の學  
風が極めて堅實な、寧ろ地味一點張と申してよい位であり  
ました。それを知らずに世間で想像するやうな華美とか  
贅澤とかいふやうなことは見ようともしても見られません  
でした。陛下にはこの學風のなかに御修學遊ばされたの  
で、一面には久邇宮様の御家風と相俟つて、すべてが御質素

乃木大將  
乃木希典  
學習院長  
陸軍大將  
伯爵  
大正元年九月十  
三日薨す

で、御堅實で、一般學生に活きた好い模範をお示し下さつた  
のでございます。日常の御學用品や御携帯品や御手廻り  
の御品なども少しも他の學生とおかはりなく、寧ろ一般學



女子學生院御在學當時の皇后陛下下

生よりも一層質素なくら  
であらせられました。御學  
用品を少しも無駄には遊ば  
されず、わづか紙一枚でも粗  
末に御扱ひになつたことは

ございませぬ、御書き損じの日本紙などは必ず御保存にな  
つて後日何かの御用に御立て遊ばすやうな次第でありま  
した。



陛下の御修學ぶりは實に一般學生の模範でありなさいました。何の學科もよく御勉強遊ばし、日毎々の御日課の如きも御豫習や御復習は十分なさいますし、宿題などもたゞの一度でも期日にお後れ遊ばすやうなことは決してありません。私には修身科を擔當して居りましたので、時としては學級全體のものに對して何かと小言を申したこともありましたが、その時陛下の御様子を御窺ひ申しますと、まるで陛下御自身の御事でもおありのやうに御聽き取り遊ばすのを御見受け申しますので、そのため一般學生への小言も幾度控へたかわかりません。

當時陛下の御學級にはなかく、優れた御嬢様方がお揃で、頭のよい方、手先のきく方、元氣のよい方才氣の勝つた方、又はごくおとなしいしとやかな方など、それ／＼特色をもつた學生が澤山居りました。小學時代は重に寺島芳榮といふ人の擔任でありました。この人は今は亡くなりましたが、學生の教育には力の限を盡され、一人々々の持ちまへの性質を傷つけずに春の草木の伸びゆくやう、自然に伸びゆくやうにといふことを主義として育てたからでもありません。せうが、その頃のこの學級は學校全體から特に注目されて、行末頼もしいことゝ大いに望を屬せられたものであります。さうして陛下はこの中におはしまして、御學問も御



技藝もすべてに涉つていつも他の學生に抜きんでて御成績優等にあらせられ、全學級のものから常に尊敬と嘆美とをお受けになつていらせられたのであります。申すも恐多いことでございますが、陛下は實にはつきりとした明敏な理智の力をお具へ遊ばし、どのやうなむづかしいことでも十分おわかりになり、又おわかりになるまでは決して御研究をお止め遊ばしません。御言葉や御文章におあらはしになるのでも、まことに簡潔で、まことに謹嚴で、一語も一句も疎かに遊ばしません。それは御苦心御修養の結果かもわかりませんが、外から拜しては少しもさうは見受けられませんでした。私共は毎々驚の目を以て一般

學生の及びもつかぬところを蔭ながら讚嘆し奉つたことでありました。或時の試験に陛下は用紙をお前に置かせられて少しも御筆をお運びになりませんので、さてはこの問題が流石に御難解でいらせられるのか知らとおもつて時計を見ると、もう時間は三十分餘も経つて居ります。それでも泰然としていらせられます。どう遊ばすことかと御案じ申し上げて居りますと、やがて御筆を御執りになるが早いか、ほんのしばらくの間に御答案はすつかり御出來になりました。そしてその御答案は實に簡明で而も要領を得、條理が整然として少しも紊れたところなく、實に立派な御成績に拜しました。つまり前の半時間は十分に御心



を静めて御考へ遊ばしたので、多くの生徒のやうにあとさ  
きの考もなく、只いち早く筆を執つて、むやみに書き急ぐの  
とは大變な相違のおありなことをつくづく感じ入つたこ  
とでありました。  
さてまた陛下の御淑徳は圓滿和平とも申し上げませうか、  
いつも御微笑を含ませられ、ゆつたりと御落ちつきの中に  
いとも優しい閑雅な御態度でおいて遊ばされました。私  
共はあの永い年月の間に御氣色のおかはりを一度でも拜  
し奉つたことはありません。平生ごく御言葉少なに渡ら  
せられますが、人の話は喜んで御聴き取り遊ばし、どんな事  
でも御耳をお借しになるのが常でありました。それゆる

信子女王  
今の伯爵三條西  
公正夫人  
智子女王  
今の伯爵大谷光  
暢夫人

同級生などは何でも珍しいことがあれば直ちに陛下に申  
し上げるのを樂みにして居つたのであります。陛下がた  
まになにかの御都合で御缺席遊ばすやうなことがありま  
すと、他の學生は何となく氣ぬけがしたやうに寂しい一日  
を過したのであります。陛下はそのころ御妹君の信子  
女王殿下や智子女王殿下と御一緒に人力車で御通ひ遊ば  
したのですが、御缺席の翌日などは早朝から學生が校門に  
集つて、三臺の人力車が續いて來られるかどうかと固唾を  
呑んで待つて居るのを見たものがありました。すべてに  
於て學生全體の敬慕の的にならせられたのであります。  
而もそこに少しの御無理もなく、わざとらしい所はなく、た



だ御淑徳の、自然の發露であらせられたのでございます。御友だちを特に御擇び遊ばすといふことはなさらず、誰彼の差別なく皆御親しみになり、又御妹君を始め下級の學生等に御慈しみを垂れさせられることは、はたから拜しても如何にも温かい感じがいたしました。御明敏におはしながら、決して他の人を御批評なさることはおありなさいませんでした。さながら春の彌生の麗かな日かげの如く何とも申し上げやうのない御親しみのある、お懐かしみのある御態度であらせられました。實に陛下は一視同仁、威あつて猛からず、初めから萬民の上に立たせられる御坤徳をお具へになつて御生れ遊ばした

かのやうに拜し奉られるのであります。

## 二 飛行機

久米正雄

久米正雄  
小説家  
山階宮  
山階宮武彦王  
追濱  
横須賀市の北方  
海軍の飛行場が  
ある

鎌倉の海岸通には山階宮様の御別邸がある。聞く所によると、この「空の宮様」の御別邸があるので、程遠からぬ追濱<sup>おつ</sup>からの飛行機といふ飛行機は、鎌倉の空を翔るごとに、宮様に敬意を表するため、海岸通の中空で一旋回ぐるりと旋回して、そして爆音高らかに目ざす方向を取るといふ。さういふわけかして、鎌倉は割に飛行機の訪問に恵まれてゐる。私は曾て、飛行機の爆音を決してやかましい、若しくはうるさいと聞いたことがない。そして飛行機を見ることは昔



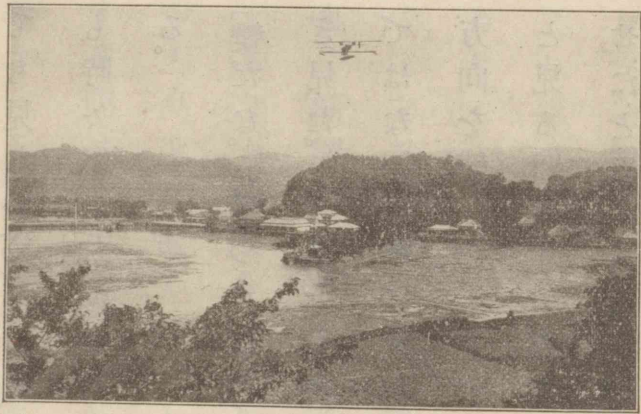
徳川大尉  
名は好敏  
今は航空兵中佐

徳川大尉だ。つたか誰だつたか。代々木で始めて飛んだのを見た高等學校生徒時代以來、可なり好きである。爆音の昂揚に連れて、なんとなく「ばんざあい」といつて見たいやうな氣持を、いまだに時々起すのである。

それは毎日鬱陶しい天氣が續いた後、漸く空が薄ぼんやりながら霽れ上つて、鎌倉の夏がやつて來たと思はせるやうな日であつた。雲は高く、薄く、純のやうにところ／＼、梳きぎれがしたまゝ、空を包んで、太陽が形を見せないで、在處だけを明るく見せてゐた。

午前十時頃だつた。私はつい四五日前移つて來たばかりの避暑宿の落ち着きのない氣分で、ぼんやり柱に背をよせたまゝ坐つてゐると、遠くから近づいて來る顫へがちな飛行機の爆音を聞いた。と、それは益

バルコニー  
露臺  
フィルム  
映畫



近づいて來て、どうやら頭上を徘徊してゐるらしい。「ばゝあ飛行機が、宮様に敬意を表してゐるのだな。」行すぐ私はさう思つた。そしてその瞬間、白い海軍服を着けられた宮様が御別邸のバルコニーに立つて望遠鏡を中空に向けながら、近侍の一人に何か説明をしてゐられる光景がフィルムとなつて心に映つた。が、何となく大儀なので、



そんな想像でたゞ心の中に飛行機の旋回を描きながら、出ても見ないでゐると、爆音はなか／＼遠ざからないで、しかも時々風の加減か、はげしくなつたり突然なくなつたりする。

「變だな。」と思つて、私は縁側へ出て、御別邸の上空あたりを仰ぎ見た。と、果して御別邸の眞上あたりに――事實はさうではなかつたかも知れぬが、――一機が鉛色の翼を擴げて、方向を變へつゝあつた。

と見る間に、その薄雲の高い空の中で、爆音を一際高く響かせたと思ふと、機はぐいといふやうに横になつて、「おや、落ちたな。」と思ふ間もなく、落着きはらつた態度でだん／＼逆さ

まになりながら、ぐるりと環を描き始めた。「落ちたのでないな。」と思つたすぐ後には、「おや、あれが横轉といふのだな。これはなか／＼おもしろいぞ。」と思つたので瞬もせず見てゐた。

するとその飛行機は續けざまに、ぐるりとぐるりと三四回見事に横倒しになると、逆轉してはまた元へ戻り、またぐるり、ぐるりと、機翼を薄光りさせながら、宙返を續ける。そして少し高度が低くなると、當りまへの姿勢に復つて、暫く上昇する間は休んでゐるが、見てゐる間に、すぐまた爆音を妙に響かせて、ぐるりぐるりを始める。初はまたするぜ、ぐるり……おやもう一度か、ぐるり……といったやうに、面白がつ



て見てゐたが、それを何回となく——無慮十二三回は續け  
たらう——續けてゐるうちに、なんだか妙に胸騒ぎがして、  
危険なやうな感じがして、こちらが苦しくなつて來た。「も  
うよしてくれ。そして落ちないうちに歸つてくれ。」さう  
願はずにはゐられないやうな氣持になつて來た。それだ  
のに殆どとめどなく、その飛行機は薄曇のした、そして、薄光  
の漲つてゐる空で、ぐるりぐるりを續けてゐる。  
が、しかし、その飛行機の鮮かさは、我々が素人目には、全く驚  
嘆すべきものであつた。さても自信のあるものかな。よ  
くもあれまでにやれるものだ。恐ろしく見事な手際だ。  
ひよつとすると、教官かも知らんなどと思ひつゝ、文字通り

手に汗して見てゐた。

しばらくたつて、やう／＼その機は横轉を止めた。そして  
私たちのほつとした氣分の中に、すぐ歸るのかと思つてゐ  
ると、今度はまた環旋を描いて、高く／＼上昇し始めた。「は  
はあ、今度こそもうやめて、高く飛んで歸つて行くつもりだ  
な。」さう思つて、なほもその行方を見てゐると、彼は突然は  
たと爆音を止めた。そして、おやと思ふ間もなく、機はゆら  
りと一揺れ揺れて、機尾を上垂れ下つたと見る間に、薄光  
りを翼に二三度射させながら、ふらり、ふらり、ふらり、ふらり  
と落葉のやうに、中空へと錐揉をして下りて來た。そして  
そのまゝで、まつすぐに下まで落ちはしまいかといふ危惧



逗子  
鎌倉の東一里

土岐善麿  
東京朝日新聞記  
者  
歌人

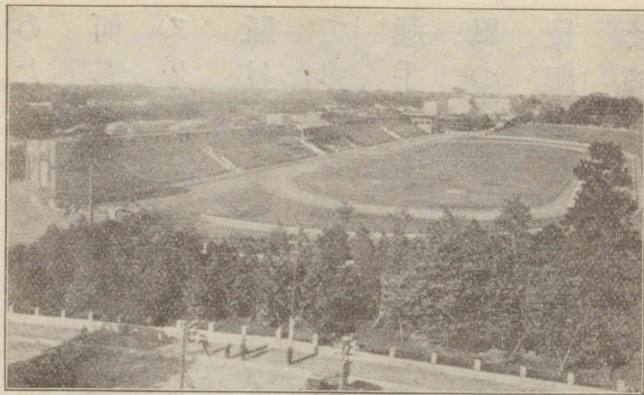
の中に、またすうつと今度は横に流れると、そのまゝ忽ち機  
の位置を當りまへに立て直して、今度は追濱の方向へ、脇目  
もふらずまっしぐらに一直線を描いて、見る／＼小さくな  
つてしまつた。  
私はその機が向ふの逗子寄りの丘の彼方へ黒點となつて  
没するまで、縁側に伸び上り伸び上り見送つた。横轉を續  
けてゐる間は、随分執拗な飛行家だと思つてゐたが、その飛  
去りぶりのすうつとしてゐるのが非常に引き立つて、なん  
となく愉快だつた。  
(微笑藝術)

三 最後まで

土岐善麿

三周……四周……

トラック  
競走する路  
ハードル  
障害物をとびこ  
えてする競走



明治神宮外苑競技場

その頃から選手の間隔が著しくな  
つて來た。  
東西對抗の陸上競技も今年が第五  
回で、その決勝に出場する選手たち  
の意氣は、關西も關東も猛烈で、新し  
い記録が期待された。  
この一萬米も今年からトラックで  
行はれることになつたから、觀衆は  
一目に選手の力量・技巧並びに作戦  
も大觀することができ、四百米のハードルや千六

三 最後まで



百米のリレーなどと共に、トラックの新しい興味になつてゐたのである。

何しろ一萬米といへば、里程にして約二里半、四百米のトラックを二十五回周らなければならぬ。一人でゆつくり駈けるさへ、いや歩くさへ、容易でないのに、一着二着を争つて多數と競走するのである。

選手たちの日頃の練習も思はれて、スタートと共に、晩春の風つめたき神宮外苑、スタンドはどよめいた。長距離なので、百米や二百米などのやうにスタートの息づまるほどの緊張さはないが、數も多く、スタイルも思ひく、色さまざまの賑はしきで、選手は各自その練習の程度と姿

スタート  
出發

神宮  
明治神宮

スタンド

觀客席

スタイル

體裁

勢とを守りつゝ快走する。

その中に一人、へうきんな赤帽を冠つて、顎にちよびひげを

はやした選手がゐた。地方青年

團の一人であつた。

スタートの時から逸早くその風

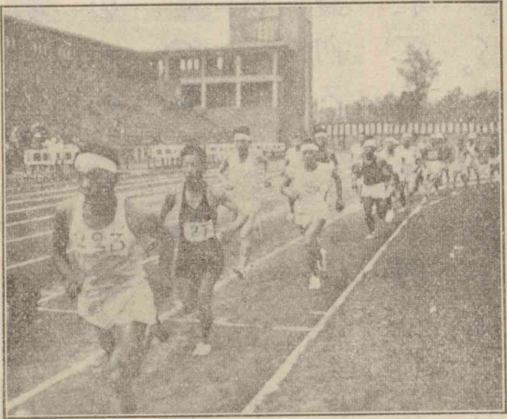
采が觀衆の目をひいて、競技場の

空氣に、一種の愛嬌をつくつた。

が彼は十周目位ですでに先頭の

選手から一周近く後れてしまつ

た。



審判委員の一人は選手が審判臺の邊へ來る毎に周數を記



した紙をめくつて「あと何回」と呼びかける。これが選手たちを一層元氣づける。あゝ一周一周と減つてゆくその回数の痛快さよ。しかし一周後れた選手に對しては、なほその一回だけを多く呼びかけられることは言ふまでもない。その度に赤帽の選手はにこ／＼と審判員に微笑を投げつけて通過する。そしてまつしぐらにトラックを走る。最初スタートの線上に溢れるほどであつた選手も、一人また二人、青空に吸はれたか、大地に沈んだか、その影を消してゆく。さういふ落伍者のあるなかに、後れても最後までと彼はねばり強く兩脚の筋肉に青春の意氣をみなぎらせつつ、額の汗を拭ひもあへず、しかも悠々と急がずあせらず、一

周一周とトラックの土を踏みかためる。

彼は一周おくれたので、先頭のすぐあとを追つて行く。一周の差さへなければ、さながら先頭を争つてゐるやうに見える。

「赤帽しつかり！」

「ひげさん頼むよ！」

豫選なので、競技といつてもこんな聲援に何處かくつろいだ空氣が漂ふ。やがてピストル一發、すでに第一着、第二着は決定したが、なほ一周餘彼は依然として悠々とトラックを駈けて、自分だけの最後のダッシュもあざやかに決勝點を踏んだのであつた。しかしそれはもう「決勝點」ではな

ダッシュ  
突進



つた。

その勝敗を眼中に置かないで、走るだけは走るといふ態度の痛快さに、スタンドの観衆は思はず一齊に、第一着の勝利者に送つたと同様な拍手を彼に送つた。彼は始めて赤帽を脱いで、それを右手に振りながら、「こゝ」と退場した。一萬米、その競走に、この選手が勝利者でなかつたことは言ふまでもない。しかし「人間」としての生活態度において決して彼は「敗北者」ではない。彼は最後まで自分の力を信じ、他を顧みることなく、明快な心境をもつて走つてゐたのである。(春歸る)

四 狗ころ

二葉亭四迷

二葉亭四迷  
本名は長谷川辰  
之助  
新聞記者  
文學者  
明治四十二年歿す

ふと目をさますとき、やん／＼といふ聲がする。耳をすまして聽いて居ると、疑もなく小狗の啼聲だ。時々咽喉でも締められるやうに、消魂しくきやん／＼と啼きたてる其の聲尻が、やがてかぼそく悲しげになつてめいる様に遠い遠い處へ消えて行く。と思へば、忽ち又近くて堪へきれぬやうに啼きだして、くん／＼と鼻をならすやうな時もあり、きやおと欠をするやうな時もある。

私は元來動物好で、わけても犬は大好だから、近處の犬は大抵知つてゐる。けれども、こんなかぼそい、いたいけな聲で啼くのは一匹も無い筈だから、不思議に思つて、そつと夜着



の中から首を出すと、  
「どうしたの。寐られないのかえ。」  
と母が寝反りを打つてこちらを向いた。私は此の返答はさしおいて、

「あれは白ぢやないねえ、お母さん。もつと小さい狗の聲だねえ。どうしたんだらう。」

「棄狗さ。」

「棄狗つて何。」

「棄狗つて。誰かゝ棄てゝいつたのさ。」

私はしばらく考へて、

「誰が棄てゝいつたんだらう。」

「大方何處かの……何處かの人さ。」

何處かの人を狗を棄てゝいつたと、私は二三度繰返して見たが分らない。

「どうして棄てゝいつたんだらう。」

「うるさいよ。」などといふ母ではない、何處までも相手になり、其の意味を説明してくれて、もう晚いから黙つてお寐。」と優しく言つて、又彼方を向いてしまつた。私も亦夜着を被つた。狗は門前を去つたのか、啼聲が稍遠くなるにつれて、父の躰が耳に附く。

寐られぬ儘に、夜着の中で、今聞いた母の説明を繰返し繰返し味つて見た。まづ何處かの飼犬が縁の下で兒を生んだ



とする。小さなむくくしたのが重なり合つて、首を擡げて、みいくと乳房を探してゐる處へ、親犬がよそから歸つて來て、そのそばへどさりと横になり、片端から抱へ込んで、べろ／＼舐めると、小さいから舌の先で他愛もなくころころと轉がされる。轉がされては大騒して起返り、又よちよちと這寄つて、ぼつちりと黒い鼻面でお腹を探り廻り、漸く柔かな乳首を探り當て、あわてゝちうと吸附いて、小さな兩手で揉みたて／＼吸出すと、甘い温かな乳汁がどく／＼と出て來て咽喉へ流れ込み、胸を下つて、何とも言へずおいしい。すると、腋の下から、まだ乳首に有附かぬ兄弟が鼻面で割込んでくる。とられまいとして、産毛の生えた腕を突張

り、大騒をやつてみるが、たうとう取られて了ひ、又其處らを探ねて他の乳首に吸附く。其の中にお腹も一杯になり親の肌で身體も温まつて、融けさうな好い心持になり、ついうとうとゝなる、くゝんだ乳首が脱けさうになる。夢心地にもあわてゝ又吸附いて、一しきり吸立てるが、直に又他愛なくうと／＼となつて乳首が遂に口を脱ける。脱けても知らずに口を開いて、小さな舌を出したなり、一向正體がない。其の時忽ち暗闇からもじやく／＼と毛の生えた、ふしくれだつた大きな腕がぬつと出て、正體なく寐入つて居る處をむずと引摺み、宙に吊す。驚いて目をぼつちり明け、いたいけな聲で悲鳴をあげながら、四足を張つて藻搔ぐ中に頭から



何かで包まれた様で、眞暗になる。窮屈で息が詰りさうだ  
 から、出ようとすが出られない。しばらく藻掻いて居る  
 中に、ふと足掻が自由になる。と領元を撮まれて高い  
 處からどさりと落された。うろくとしてそこらを見廻  
 すけれど、何だか變な、寂しい、眞暗な處で、誰も居ない。茫然  
 としてゐると、雨に打たれて見る間に濡れしよばたれ、恐し  
 く寒くなる。身慄びくひ一つして、くんとと親を呼んで見る  
 が、何處からも出て來ない。途方に暮れて、よち／＼這出し、  
 雨の夜半を唯ひとり温かな親の乳房を慕つて悲しげに啼  
 廻る聲が、先刻一度門前へ來て、又何處へかさまよつて行つ  
 たやうだつたが、其が何時か又戻つて來て、何處をどう潜り

此の半では  
 自分想像

込んだのか、今は啼聲が正しく玄關先に聞える。

「お母さん、門の中へ這入つて來たやうだよ。」

と、私が何だか居たハットシテララナイヤウナヤモチまらなやうな氣になつて、又母に言  
 ひ掛けると、母は氣の無ささうな聲で、

「さうだね。」

「出て見ようか。」

「出て見ないでも好いよ。寒いぢやないかね。」

「だつてえ。あら、あんなに啼いてゐる。」

と折柄絶え入るやうに啼き號ぶ狗の聲に、私は我知らずむ  
 つくり起き上つたが、何だか一人では怖いやうな氣がして、  
 「よう、お母さん行つて見よう、よう。」



「本當に仕様がなない兒だねえ。」

と、口小言を言ひく、母も澁々起きて、雪洞ゆきどうをつけて起き上つたから、私も其の後について、玄關と云つてもついで次の間だが、玄關へ出た。

母が履脱へ降りて格子戸の掛金を外し、がらりと雨戸を繰ると、颯と夜風が吹込んで、雪洞の火がちらちらと靡く。其の時小さな鞠の様なものが、つと軒下を飛退いた様だつたが、やがて雪洞の火先が立直つて、一道の光がさつと戸外にさし、雨水の處々に溜つた地面を、一筋細長く照し出した處を見ると、つい其處に生後まだ一箇月もたぬ、むくくと太つた、赤ちやけた狗ころが、小指ほどの尻尾をちぎれさう

に掉り立て、此方を見上げてゐる。形かたちは私が寢て居て想像したよりも大きかつたが、果して全身雨に濡れしよぼたれて、泥だらけになり、だらりと垂れた、割合に大きい耳から雫をたらし、ぼつちりと兩の眼を青貝のやうに並べて光らせてゐる。

「おやく、まあ、かはいらしい。」

と母もつい言つてしまつた。況マシヤや私は犬好きだ。じつとして居られない。母の袖の下から首を出して、ちよつちよつと呼んで見た。

すると左程畏れた様子もなく、ちよこくと側へ来て、流石に少し平べつたくなりながら、頭を撫でてやる私の手を下



からぐいぐい押し上げるやうにして、べろくと舐め廻し、手をくれるつもりなのか、頬に圓い前足を舉げて、ばたくやつてゐたが、果はヤシシクリンやはりと痛まぬ程に小指を咬む。

私のかはいくてぐたまらない。母の面を見上げながら、少し鼻聲を出し掛けて、

「お母さん、何か遣つて。」

「遣るのも好いけれど、居ソノ附ツクいてしまふと、仕方がないねえ。」と、口では拒むやうな事を言ひながら、それでも臺所へ行つて、缺茶碗に冷飯を盛つて、何かの汁を掛けて来てくれた。早速履脱へ入れて之を當がふと、兒狗は一寸香を嗅いで、すぐ甘さうに先づびちやくくと舐めだしたが、汁が鼻の孔へ

入ると見えて時々しんぐと小さな嚏をする。忽ち汁を舐め盡して今度は飯に掛つた。他に争ふ兄弟も無いのに、頻に小言を言ひながら、がつくと喫べ出したが、飯は未だ喰ひ慣れぬかして、とかく上顎に引附く。首を掉つて見るが、そんな事ではなかく取れない。果は前足で口の端を引搔くやうな真似をして、大藻搔きに藻搔く。

此の隙に私は母と談判を始めて、今晚一晚泊めて遣つてと、雪洞を持つた手にぶら下る。母は一寸遣つたが、もうかうなつては仕方がない。「お父さんに叱られるけれど」と言ひながら、詰りきん棧た俵は法師ほを搜して来て、履脱の隅に敷いて遣つた。それは好かつたが、其の晩啼き通されて、私はちつとも



知らなんだが、お蔭で母は父に小言を言はれたさうな。(平凡)

### 五 大原女

出町橋  
京都市の北鴨川  
と高野川との合  
する處にかゝつ  
てゐる橋

都の春の錦を織る賀茂の堤の柳の並木を、出町橋の袂で數へ盡し、比叡の山の裾を廻つて清く流れる高野川の響を友としつゝ、北へ三里行けば、八瀬へ出る。八瀬の北には大原の里がある。

京の田舎の片ほとり、八瀬や大原の芹生の里。黒木買はしやんせんかいな。と舞の歌に謠はれてゐる大原女の住みかは、この二つの村である。

大原女の服装は頗る詩趣に富んでゐる。黒木綿の着物に御所染と稱する白黒だんだらの帯を締め、縫取模様などの



京附近地圖

ある三幅の黒い前垂をかけ、手には手甲をはめて甲から前腕を覆ひ、足には脚絆を穿ち、足袋をはいて、其の上に小さい甲掛を着ける。その甲掛は草鞋の紐で脚絆や足袋のすれるのを防ぐ爲だと云ふ。帯は一幅の布を五つ折にしたまゝで巻き付け、脚絆は皆前であはせる。これらは何れも木綿で拵へ



る。脚絆や手甲や甲掛は、白と黒と二通りある。白いの  
京行きと云つて黒木を賣りに出る時、黒いのは山行きとい  
つて薪採や草苧などに行く時に用ひる。



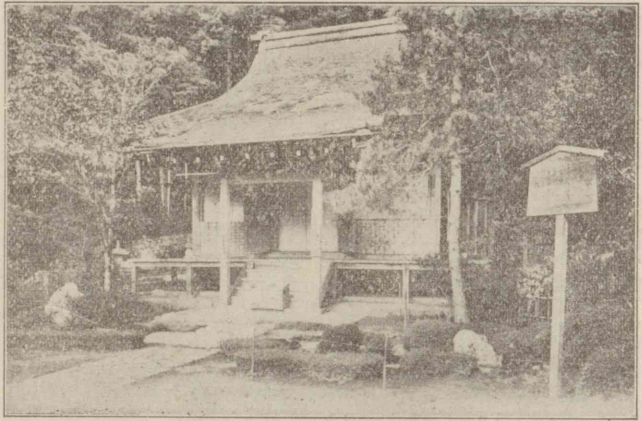
大原女  
大 髪は投島田をぐつさり  
とつぶしたやうな結ひ  
原 方で、白地に山水の景色  
女 等を染めた手拭を風流

よりの見えとして、縮緬やモスリンの丸ぐけの派手な襷を  
かけ、中には腰へ長い煙管を差して居るものもある。  
かうした大原女の珍しい風俗は建禮門院の侍女阿波内侍

から始つたのだといふ。

建禮門院は平相國の御息女、安徳  
天皇の御母君でいらせられる。

壽永の秋、平家の一門が壇の浦の  
藻屑と消えたとき、門院も安徳天  
皇につゞいて御入水遊ばされた  
が、源氏方のものに救ひ上げられ  
て京都へ御歸になり、尼となつて  
大原の寂光院へ入らせられ、天皇  
を始め奉り、平家一門の後世をお  
弔になつた。昨日にかはる片山



寂光院本堂

里の佗住ひ、どんなに御痛はしい有様であつたらう。仕へ



まつる阿波内侍も山に登つては黒木を折り、谷に下つては水を汲み、まめくしく立働けば、膚は破れ、髪も亂れて蓬の様になる、其を恥ぢて、門院の御前へ出る時に頭を着物の袖で包んだのが、後に傳はつて手拭を被る風となつたといふ言傳へになつてゐる。

大原女の物を運ぶ様はまた一風變つたものである。何によらず頭の上へのせ、それを支へる爲に手拭を被つた上へ輪を載せる。輪は頭にのせる程な大きさに、丁度釜敷の様な恰好をしてゐる。山行きのは藁で作るが、京行きのは葦を用ひる。山から折つて來た黒木は軒端に積んで置いて乾かし、束ねた根元の方を前にし、先の方を後にして頭へ載



大原女

(土田麥僮筆)



高濱虚子  
名は清  
佛人  
小説家  
この文は作者が  
比叡山東塔の宿  
院に泊つたその  
翌朝の記事であ  
る

せ、京へ出て大路・小路を賣り歩く姿は誠に一幅の繪である。  
鐵漿つけた齒をもれる優しい賣聲、一日に一里を行き、十日  
に五里行くといつたやうな緩やかな足取。歴史の都、花の  
都の彩りの最も濃くしてふさはしいのはこの大原女であ  
る。香川景樹の歌に、

めせやめせ、夕げの爪木、めせやめせ。

かへるさ遠し、大原の里。  
(近畿國語讀本)

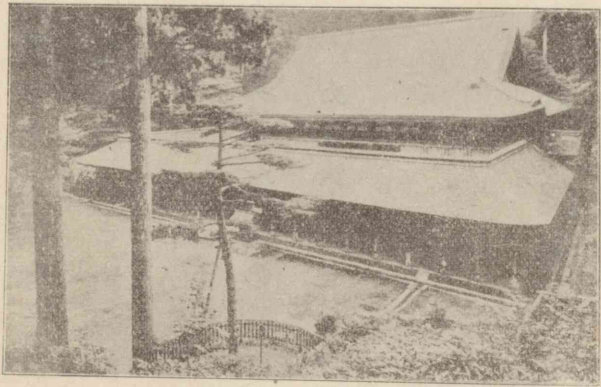
## 六 深山の鳥

高濱虚子

寢床を出て、齒楊子を使ひながら、湖水の見える部屋に行つ  
て見る。朝日が部屋一面にさしこんで居る。湖水と思は

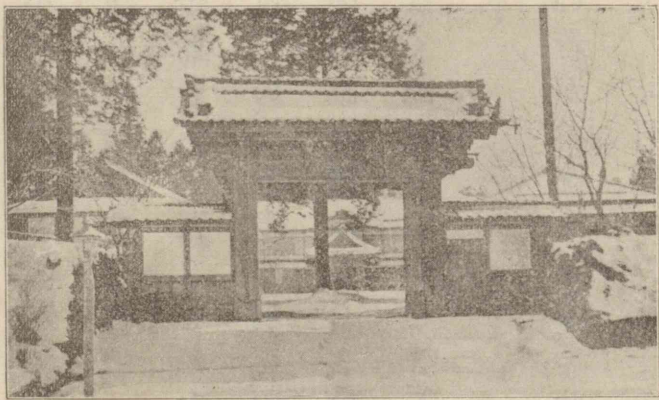


れる邊は、雲ばかりで何も見えない。富士の頂上から雲海を見下したのと似た景色である。部屋の下は東谷になつて居るので、我が眼よりやゝ高く、やゝ低く、數知れぬ杉の梢が、鉾の様に突立つて居る。左手には北谷の向ふにあたる峰が、鋸の齒のやうな杉を背に並べて、湖の方に流れて居る。空氣が清い上にも清いので、近景の杉の梢も、遠景の杉の森も、鮮やかな色をして居る。さうしてその間を薄い霞が流れて居る。



比叡山延曆寺根本中堂

非常に静かである。自分の呼吸の外、うき世の物音は何も聞えない。只此の天地を我が物顔に啼いて居るのは小鳥である。何といふかはいゝ聲の小鳥があるものであらう。名のわからないのが残念である。その杉の梢で一羽啼いて居る。彼方の杉の梢で他の一羽が答へて居る。遙か向ふの谷深く、他の一羽が應じて居る。よく耳を澄ますと、なほ二三羽の聲がどこかで聞えるやう



比叡山東塔宿院



である。又その小鳥の合奏を破るやうに、他の聲の小鳥が、突然その間に高音を張る。前の小鳥ほど優しい聲では無いが、また凜々しいところがあつて、その音の空山に響く趣が何とも言へない。羯鼓の上に金鈴を落したら、こんな音が出もしようか。それも一羽では無い。三羽四羽と聞くうちにだんぐ、殖えて来る。前の小鳥が縦絲なら、この小鳥は横絲のやうに、互に錯綜して、よく調和を保つところが面白い。突然「けんく」とけたましい音が谷を横ぎる。此方の谷にも響けば、彼方の峰にも響く。昨日聞いた雉子の聲よりも、やゝ急調である。多分山鳥でもあらうか。前の

二つの小鳥で織りなした美しい絹を、たゞ一聲に引裂いたかと疑はれる。

暫くしてその聲は、谷の底、峯の奥（奥の奥）に浸み込んでしまつて、その後は元の通り静かになる。眞先にその静けさを破つたものは鶯の聲である。絹に置かれる緋のやうに美しい。一つの緋が置かれると、また縦絲を織つて前の小鳥が啼く。また横絲を織つて次の小鳥が啼く。緋が啼く。縦絲が啼く。横絲が啼く。この絹をまた山鳥の聲が破るのかと思ひながら、待ちまうけて居ると、不思議な聲が別に起る。それは麓の里の池で聞く蛙の聲によく似てゐる、谷の神社の鰐口が、口をあけてつぶやくのかとも疑はれる。他の鳥の



聲々がみな高調で晴々とした中に、ひとり低調で、不平らしい音を出すのが面白い。友は「啄木鳥だらう。」といった。二人の和尚は「山鳩だらう。」といった。

琵琶湖の上には、まだ漠々たる白雲が漂つて居る。杉の梢を流れる霞は、少しづつ薄らいで来て、だん／＼と谷が深く見えて来る。(新寫生文)

七 角笛の響

吉江孤雁

フランスのアルプスの山へ行きますと、夕方など、霧のかゝつて来る草原や杉の森の中から角笛の響が遠く近く聞えて來ます。谿を隔て、向ふの山から、その響が林や丘や谷

吉江孤雁  
名は喬松  
佛文學者  
早稻田大學教授  
アルプス  
フランス・スイ  
ス・イタリーに  
跨る大山脈

間に俯して、悲しく物寂しく、小暗くなつた小路の上へかすかにたゆたひます。

何のための角笛でせう。これは一日中草原へ放しておいた羊の群を呼集めるために牧童が吹く笛の音です。羊は長い草の中や、夏草の咲きみちた森蔭を一日中自由に遊びまはつて、思はず遠くまで迷つてゐる中に日が暮れます。それを番をしてゐる羊飼の子供は、まづ犬をやつて集めます。羊飼の犬くらの賢いものはありません。幾十幾百とも知れぬ白い羊の群は、草原から、森の中から、八方から犬に教へられて、むく／＼と雲の涌くやうに、一つ處へ集つて來ます。犬は鳴きながら八方を駆け廻つて、草の中へ、森の中



へ、谿の中へ飛込んで、後れて途を失つた羊を一匹残らず探  
しだします。その集つて來た羊のまはりを、前へ後へ左右  
へ駆け廻つて、後れたものを叱りつけ、弱つたものをいたは  
り勵ますやうにして、次第に羊小舎の方へつれて來ます。  
それでもまだ見落されて迷つてゐる羊が草の中に居るか  
も知れません。羊飼は角笛を吹立てます。その響があた  
りの林や谿に響き渡ると、どんな處に迷つてゐるものでも  
必ずその響をたよりに集つて來ます。中には頸に鈴をつ  
けた羊がゐます。その鈴の響が夕暗の中で、草の葉の茂つ  
てゐる中から聞えて來るのは、いかにも寂しい、また懐かし  
いものです。



(カール・グスタフ・カールズ画)

羊飼ひ



ふるい物語  
西暦1088年のシャルマーニユ帝のスペイン征伐の史實をもとにして第十一世紀の中頃ローランの歌と題する叙事詩によまれた騎士物語

シャルマーニユ大帝  
フランクの王  
西暦1088年歿す

この角笛の響には、フランスのふるい物語がこもつてゐます。今日アルプスの山中でこの羊飼の笛の音を夏の夕方に耳にした人ならば、必ずその物語を思ひ出すでせう。その話といふのは次のとおりです。

昔、今から千百年以上も昔のことです。フランスとドイツとの兩國に互つて、廣大な領土を占めてゐたシャルマーニユ大帝といふえらい王様が、ありました。當時のヨーロッパは一時全くこの王様の支配を受けたくらゐの勢でした。ところがその頃スペインへはアラビヤ人が地中海から侵入して、非常な勢でスペインを征服して、シャルマーニユ大帝に對しても決して服従しませんでした。シャルマーニ



ピレネ山  
フランスとい  
スパニヤとの  
國境に連る山  
脈

ユ大帝は大層怒つて、是非自身にこのアラビヤ人を征伐し  
なければならぬといふので、軍隊を引きつれて、ピレネ山  
といふ高い山を越えてスペインへはひりました。そして  
このアラビヤ人等を征服していよくフランスへ引上げ  
て來ることになつたのです。  
さてシャルマーニュ大帝は隊伍を整へて、しづくくとピレ  
ネ山を越えてフランスの國の方へ向つて來ました。幾月  
もの戦で人々は早く故郷の空が仰ぎたい、故郷の山川が望  
みたい、そしてその美しいフランスの土地から産する紫の  
葡萄の珠と、その葡萄から造られる葡萄酒の香とを思つて、  
胸を躍らせながら勇んで山を登つて來ました。けれど其

の時シャルマーニュ大帝一人だけは何となく沈んだやう  
な顔色をして、部下の者どもがはしやぎ騒いでゐるにもか  
かはらず、黙つてとかく浮かない様子をしてゐました。そ  
れはいつも自分の傍を離れずにあつた自分の甥のローラン  
といふ英雄が傍にゐなかつたためでした。ローランはそ  
の時何處にゐたでせうか。この英雄は、大帝の軍隊がスベ  
インを引上げる時、その軍隊の殿しんがりになつて最後から敵のお  
さへをして來るのでした。といふのは、アラビヤ人はシャ  
ルマーニュ大帝と和睦の約束を結んだけれど、何時その約  
束を破つて謀叛を起さないともかぎらない。それがため  
一軍の中の最もすぐれた勇者のローランが最後に残つて、



18  
690  
135  
216

その様子を見て引上げることになつてゐました。そして若しアラビヤ人が叛いて背後から襲ひかゝつたならば、その急を告げる手段として角笛を吹くことになつてゐました。それで若しその角笛の響が聞えたならば、大帝の軍はすぐ引返してローランを助けることにきめてあつたのです。もう大帝の部下は勇みに勇んで山路を登りつめてそろそろ下り坂の方へ向つてゐました。フランスの空が彼等の眼の前に輝きだし、美しいフランスの平野が彼等の脚の下へ廣がりだしました。彼等は躍り上つて萬歳を叫びました。けれど大帝一人はやはり黙つて沈んだ顔付きをしてゐました。そして今彼の部下が叫んだ萬歳の聲がま

だ消えてしまはないうちに、大帝は遙か後方で、角笛の響がしたやうに思つたのです。彼は不意に馬を停めて、じつと耳を澄ましました。彼はまたたしかにその角笛の響を聞いたやうに思ひました。彼は部下を顧みて、今角笛が響いたではないか、ローランの角笛が。」と言ひました。部下のものも立止まつて耳を澄ましました。けれどその時は、たゞ谿を走る水の音と、林の中の風の響しか聞えませんでした。皆のものは大帝に、「それは風か水の音でせう。」と言ひました。軍隊はまた大帝を圍んで下り坂をおり始めました。けれどシャルマーニユは甥のローランのことが何分にも氣にかゝつてなりません。部下の軍隊が悦び騒ぐ中にた



だ一人黙々として馬を進めてゐました。すると今度はたしかにはつきりと「ぼおう、ぼおう」といふ角笛の響が、人馬の騒の上に聞えて來ました。シャルマーニユは「そらつ」といつて馬の頭を立て直しました。今度こそは明かに皆のものゝ耳に聞えました。部下のものも一時に足をかへして今來た路へ急ぎました。角笛はなほ斷續して響いて來ました。「ぼおう、ぼおう」と太く細く、訴へるやうに、救を求めるやうに、急を告げるやうに、怨むが如く、怒るが如く、林の奥から谿の中から、一面に響きました。シャルマーニユは一軍を引返して大急ぎにピレネ山をスペインの方へ駈けおりました。

ローランは一體どうしたでせうか。彼は四五人の従者とともに軍隊の最後からしづくと山路へかゝつて來たのでした。するとシャルマーニユ大帝が心配してゐた通りそれまで従順な風をしてゐたアラビヤ人等は、俄に大聲で叫び、大勢の人間が一時に兵器を執つてローランの後からどつと襲ひかゝつて來るのでした。彼等が恐れてゐたのはこの英雄ローランとその部下でした。今そのローランが小人數の人々と軍の最後から山路へかゝるのを見ると、この人々を討取つてしまひさへすればシャルマーニユの大軍とても恐るゝに足らぬと思つたのでせう。いちはやくローランの身邊を八方から取巻いて兵器をつきつけて



來るのでした。そして口々に「ローランよ、自分等の軍へ降れ、でなければお前の命はないぞ。シャルマーニユの軍はもはや遠くお前を置いて行つてしまつた。」と叫ぶのでした。ローランはその中に突立つて八方を睨みつけ「汚らはしい。いかで汝等に降参するものか。この蠻人等よ、我が劍一度び鞘を脱すれば、汝等の頭は木の葉のやうに拂ひ落されるぞ。」と大聲に叫びたてました。その勢でアラビヤ人等は一時四方へ退きました。また多數を恃んで集つて來ます。從者は約束の角笛を吹き立てようと思つたが、ローランはそれをとめて吹かせません。そして彼の愛してゐた大劍デュランダールを抜き放つて、獅子王のやうに狂ひまは

りました。アラビヤ人等はその度毎に、ときをつくつて逃げ下りるけれど、執念くもまた攻寄せて來ます。斬殺され、踏殺されて、周圍はアラビヤ人の死體が山と重りました。けれども大勢を恃むアラビヤ人は一向にひるまず攻寄せます。或者は山路を上へ登つて大きな岩を動かし、ローランをおどしつけて、早く降参せよ。それでなければ此の岩を落して皆殺しにする。」と言ひました。ローランは嘲笑つて身を飛びのけたと思ふと、その大岩は非常な響を立て、却てアラビヤ人等の中へ轉げ落ち、多數の者を怪我させました。けれど何分にも數知れぬ攻手のために、流石のローランも



次第々々に疲れて來ました。部下の者も或は傷つき或は死にました。もう如何とも仕方がないので、彼は自分で角笛を取上げて、息の限り死者狂ひに吹立てました。角笛の吹口はローランの口から出る血で赤く染りました。二聲三聲、その聲は山々谿々に、恐ろしい大きな牛の最後の叫びのやうに、俯して鳴り渡りました。

それを見るとアラビヤ人等は一齊に聲をあげて、森の中から八方にローランを取まいて肉薄しました。彼はもう必死の力で荒れ狂ひ、跳び廻り、人間業とも思はれぬ働をしました。が、その中に、彼の親友でいつも彼と共にシャルマーニユ大帝を助けて働いたオリヴァイエといふ英雄がまづ傷つ

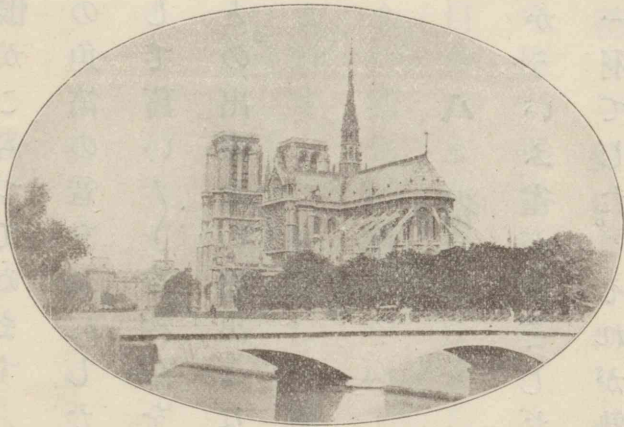
き倒れて、ローランの名を呼んで、神様は御身を守り給ふ。」といつて息を引取つてしまひました。

終には流石のローランも、もはや自分の最期が來たと覺悟をきめました。が、それにしても、自分が今まで幾十回幾百回となく戦ふ毎に勝つて來たその愛劍デュランダールを蠻人の手には渡したくはない、むしろ岩を切つて劍を打折つてしまはうと、傍の大岩にはつしとばかり切りつけました。すると、その劍の先から火花がぱつと散りました。その時ローランは、今まで自分が戦つて來た幾つかの勝利の姿がまぎ／＼とその火花の中に浮び上るのを見ました。「おゝデュランダールよ。おんみは私とともにシャルマーニユ



を助けて、幾つの國、幾つの土地を征服して來た。けれども  
 う私も最期だ。神よ、フランスを救ひ給へ。」彼はさう言ふ  
 と大きな眼に涙を湛へて、一本の松の樹陰へ倒れてしまひ  
 ました。その時です。ローランの閉ぢかゝつて行く目の  
 前へ、六萬のフランスの兵士が、怒り狂ふシャルマーニユを  
 先頭に、関の聲をあげながら殺到してアラビヤ人等を追ひ  
 散らして行くのでした。そしてシャルマーニユ大帝が松  
 の樹陰に打倒れてゐるローランの姿を見るなり駈寄つて  
 それを抱き起しました瞬間に、この英雄はもはやこの世の  
 人ではなかつたのです。命の限り吹立てた角笛の響はまだ  
 谷の奥に飴して残つてゐましたが。

ノートル、ダム  
 パリにある教會  
 聖母寺の義  
 1214年竣工



院 寺 ム ダ ル ト - ノ

やがてこの大帝の怒と悲みとが恐ろしい重い罰となつて  
 敵のアラビヤ人の上に加へら  
 れたことは言ふまでもありま  
 せん。シャルマーニユ大帝が  
 馬に跨り、その馬の前の右と左  
 とにローランとオリヴァイエと  
 が立つてゐる勇ましい姿は、今  
 日フランスの都パリへ行く人  
 ならば、何人でもそれをノート  
 ル、ダムといふ大きな美しいお  
 寺の前に見ることが出来ます。



角笛の響の中には、今でもなほこの英雄ローランの最期の恨がこもつてゐます。夏の夕方アルプ山中で一度でもこの角笛の音を耳にしたものは、その悲しげな、物寂しげな、そして舊いく昔物語を籠めた不思議な響は、永久忘れることの出来ない思出となつて残つてゐることとせう。

(角笛のひびき)

### 八 雀

北原白秋

北原白秋  
名は隆吉  
詩人  
歌人

かういふ雀がゐました。それが熟しきつた陸稻の穂に、その横から飛びつきました。さうしてその儘前向きにその穂先に縋り

つくつと、重みでその穂が次第に撓んで來ます。そこでその穂と一緒にじんわりと雀がさがつて來ます。すると愈その穂が垂れて、尻尾が地に着きさうになると、つつと離して、自分はまた羽ばたきして、宙で大喜びです。

また穂先に縋りついて下つて來ると、また前のやうにつつと離す。これをたゞ獨で、何時までもくやつてゐるのでした。

まるで子供です。

これも前のと似てゐます。

雀が一羽孟宗のほずゑに止つてゐました。雀はほずゑの笹葉と一緒に揺れてゐました。風があつたのです。見て



ゐると孟宗竹が上半身から全部に大きく緩やかに揺れて  
ゐるが、風が強くと出たらしい、その竹が雀のゐるうへから次



(筆山慶原小) 雀に竹

第に斜に傾いて来る。それでも雀は飛離れずに辛抱のし  
きれるだけしがみついて、じつとしてゐる。そのうちに愈  
身體が枝と垂直にぶら下つて了つて、もうどうにもならな

葛飾の家  
東京府南葛飾郡  
小岩村に居た時  
の寓居

くなる、やつと枝を放して、宙で羽ばたきしながら、ちゆつ、  
ちゆつ、ちゆつとです。可なり辛抱強い遊です、これなどは、  
とところで、をかしくてかはい、のは、葛飾の家の古池に水浴  
びをしてゐた雀でした。

それは鴉の行水コウスイするのを見てゐて、ついたまらなくなつた  
のです。鴉がちやぶくと綺麗な水玉を跳ね散らすと、雀  
も二三羽向ふの稗草のかげでぱちやくとです。暑い日で  
眞夏の静かな光を頭からかぶつて、をかしさうにちよつと  
水に翼をつけてぱちやくとです。まるで子供が水鉄砲で  
も弾くやうに、眩アヤシしさに頭を振り／＼でした。



冬になつて、その古池に厚い氷が張りつめた。或朝、何氣なく見てゐると、雀が一羽、羽ばたきそこなつて氷の上に落ちると、そのまゝするくくと迂りました。これは面白いといふので、また翼をひろげて、小さな二つの脚で、小意氣に身を反らすと、するくするくです。と、よろけさうになつて慌てゝ、縁の枯つ葉の眞菰に縋りついて了ひました。ちゆつちゆ。

するとまた外のが、それを見てちゆつちゆ、頭を前にうつぶけたなり、するりと、迂つて轉んで了ひました。

今度はまた三番目のがするくくとやると、三足目でするりとなつて、尻餅をついて了ひました。ちゆつちゆ。

それから三羽の雀はもう嬉しくてたまりません。代り番ここに夢中になつて、するくするく。

そのかはいかつた事といつたらありません。

かういふ雀が集つたら、何か事あれかして、ちゆつちゆ騒いでゐます。

時とすると、大勢が庇に出て、一羽が電線の上で綱わたりでもすると、もう大喜びで、やんやくです。

雀はまつたく面白がりやの、お調子乗りの、ふざけずきで、喜び出したら無性にうれしがつて、もう一切無我夢中です。

(雀の生活)



葛原 幽  
教育家  
文學者

九 幼き日のうた

葛原 幽

峠みち

留守居がいやで  
ついて来た  
町の歸りの峠みち、  
半分登つた日暮がた、  
脚がだるいと下駄ぬいで、  
しやがんだりした私です、  
母困らせた私です。  
すかしてだまして

小一里は

大きな包みを左手に  
太つた私を右の手に  
引上げて来た母さまは、  
疲れもいとはずあと一里  
おぶつて歸つてくれました。

棟のぺんく草

母家の藁屋根、棟瓦、

瓦のすきまに

のびだした



べんく草の友だちは

晝間は雀

山鳥

夜は夜どほし夜明けまで

棟の瓦の

光るまで

大星・小星が下りて来て

べんく草と

あそびます

一〇 良寛上人と馬

島崎藤村

良寛上人

禪僧

歌人

天保二年(西元一八一七)

寂す

島崎藤村

名は春樹

文學者

出雲崎

越後國三島郡出

雲崎町

日本海岸の小さな町

良寛上人は越後の國の出雲崎といふ處に生れた人でした。髪を剃つてお寺に入ったのは、十八歳だといひますが、それから七十五歳のおぢいさんになるまで生きて居た名高い坊さんでした。この良寛上人は世にも珍しいほど子供の好きな人でした。ほんとに子供のお友達になり生れて来たやうな人で、行く先で男の子や女の子と一緒に遊びました。「良寛さま、遊びなさいな。」と子供が言へば、上人はさういふ子供を相手に隠れんぼなどをして、日の暮れるのを忘れるくらゐの人でした。

この子供好きな良寛上人が越後の國の三島郡といふ處の



ある村でなくなつた時は、子供の世界は火が消えたやうになりました。七十になつておはじきをしたり手毬をついたりしたほどの上人ですから、どうしてあの上人が達者な時分には隠れんぼどころか、随分思ひ切つた子供らしい遊をして幼いものを悦ばせました。

上人はよく死んだ者の真似などをして、路傍に横になつて居たこともありました。それを見ると子供たちは大喜びで、その上から草をかける、木の葉をかける、しまひには木の葉や草で上人を埋めてしまつて、笑ひ楽しんだこともありました。そんないたづらをする子供たちが木の葉や草を集めて運んで来る間でも、上人は靜かに路傍に横になりな

がら、子供たちのすることを楽しむやうな人でした。どう



かするとその死んだふりをして居る上人の鼻をつまみに来るやうなそんな悪ふざけをする子供があつても、それでも腹を立てませんでした。それほどまでに上人は子供を愛しました。

良寛上人がなくなりましてから、がっかりしたのは子供たちでした。あんな好いお友達が居なくなつたのですか



ら、俄かに寂しくなつたのです。丁度村はづれの百姓の家に飼はれて居る馬がありました。その馬は鳴き聲からして愚かな馬で、あたりまへの馬のやうにひいんとは鳴けないくらゐるなものでした。

「あゝん」

その愚かな馬の鳴き聲を聞いたばかりでも子供たちは吹き出してしまひました。

不思議にもその「あゝん」が子供たちの氣に入りました。どうかすると馬は途方もない大きな聲を出します。遠いところにいる子供たちまでその聲を聞きつけて馬を見にやつて來ます。その馬は愚かなものではありましたが、おと

ヒ人か  
老衰涙  
び死す

なしくていつの間にか子供の遊び相手になりました。それに小さな馬の割合には力もありまして、子供を背中に載せてはよくそこいらを樂しさうに歩きまはりました。どうかすると、そのいたづらな子供たちが馬の尻尾などを引張りまはしても、馬はかへつてそれを嬉しさうにして、大きな圓い眼のふちへ皺をよせて笑ひました。

「まあ、あの馬の鳴き聲は、嬉しくてあんな聲を出すんだらうか。それとも何か不足であんな聲を出すだらうか。」と村の人たちは言ひ合つて、馬の「あゝん」を聞く度に笑ひました。

正月の六日はなくなつた良寛上人の命日にあたりました。



その日が來ると村の人たちは上人の好きなものを思ひ思ひに佛様へ上げました。そして、あれほど子供の好きな上人のことですから、みんなと遊んで下さつた時と同じやうに面白い笠をかぶり、杖をつき、乞食坊主のやうなかまはないなりをして、きつと命日には諸方の家へ來て下さるだらうといひました。あの上人の形見の品として、立派な字で書いた額の掛物を大切にしている家では、せめて私共の門口にはお立ち下さるだらうといひました。いや他の家へはお寄りにならなくとも、あの子供好きな上人が手製の毬を大切にしている私どもへはお見えになるだらうと言ふのもありました。

その命日の夕方に、村の子供たちは例の愚かな馬の居る百姓家を見に行つてびつくりしました。なぜかといひますに、そんなきたない馬小屋の中に居るものでも佛様の思召に叶うたかして、馬の頭からは御光がさしてゐましたから。その時になつて子供たちはあの良寛上人がなくなつた後まで自分たちを愛して居て下さることを知りました。あの上人の來て下さるといふ家は、形見の額の掛物を大切にしている家でもなく、上人が手製の毬を大切にしている家でもなく、やはり子供の好きな者の居る貧しい馬小屋の門口だといふことを知りました。(島崎藤村集)



一一 目標

ランス  
フランスの東北  
白耳義の國境に  
近い市街

一九一四年十一月二十六日から二十七日の朝にかけて、今  
までランス附近に陣を布いて居た獨逸重砲兵の一隊は、何  
處へか其の姿を隠してしまつた。佛軍は盛に飛行機を縱  
つてみたが、容易に發見することが出来なかつた。いろいろ  
ろと研究した末、小丘上にある一農家に偵察兵を派して、敵  
軍を搜索しようとしたが、此の任務に就く者は、萬死の覺  
悟をしなければならなかつた。遂に幾人か志願して出た。  
決死の勇士の中から、三名の曹長を派遣する事となつた。  
二人の曹長は、林間を這ひ或は敵弾に身を暴して千辛萬苦  
の末、遂に無事に目的の農家に忍び込む事が出来た。それ

から、數分時経つてから、曹長は電話にかゝつた。  
「もし、え、電線が無事に引込みました。申はい、二人は  
今納屋の中に隠れて居ります。獨兵は目前に居るので  
あります。此の農家の北、千五百米、地圖上に示してある  
山林を目標に照準して下さい。」  
味方の巨砲は轟然と轟いた。  
「隊長殿、前面に落下。照準は猶百米前方。少し右方に過  
ぐ。左方照準。然り。其の邊。命中。命中。的確です。」  
殷々轟々、我が軍の打出す砲弾に、敵兵は算を亂して倒れた。  
「もし、敵は非常に混亂して居ります。はい、私どもは、  
納屋の中に隠れて居るので、至極安全です。此の家の納



屋の明り窓は、敵軍の方に開いて居りますから、偵察には非常に便利であります。」

十分許の間に、我が軍は敵の砲兵を殆ど撃滅してしまつた。すると、けたましく電話がかゝつて來た。

「隊長殿、砲撃中止。敵は山林から退却を開始し、今我が農家の方向に向つて移動して居ます。え、農家、私どもが居る此の家の方へであります。撤退。撤退せよといはれるのでありますか。併し若し私どもが退却してしまつたら、今後の報告はどうしませう。はい、いや、今しばらく留つて形勢を見たいと思ひます。納屋の中に居りますから敵兵に發見される事はありませぬ。敵は此處から

三十米の處に砲列を布いて居ります。え、出發、撤退するのでですか。あ、もう遅くあります。獨兵は庭の中へ這入つて來ました。なに構ひません。敵は全部用意を整へて陣を布きました。隊長殿。今であります。砲撃開始。目標は此の農家。いえ、私どもを目標にして砲撃して下さい。一分の猶豫もありません。早く。目標は農家であります。

嗚呼勇敢な兵士。隊長の身として斯様な忠勇な部下をどうして己れの砲弾で殺すことが出來よう。併し二人の兵士は殺しても國家をば救はねばならぬ。好し。二人の讐は打つて遣るといふや否や號令一下。忽ち農家の礎も敵



軍の砲車も、激烈な佛軍の彈丸に碎け散つて、さしもの敵を見事に全滅させてしまつた。嗚呼、勇敢な兵士。其の電話の聲は今なほ戦友の耳に残つてゐるけれども、其の姿も、其の農家も、最早影を止めぬやうになつてしまつた。

(時局に關する教育資料)

一二 働く料簡 和田萬吉

働く料簡

乞食、貴婦人の後ろについてうるさく施をねだつたが、斷られて離れ際に、少々戴けば、今覺悟したやうな事もせず、濟みますに。」と言つた。貴婦人、さては乞食は自殺でもする積

りかと氣味悪くも亦不便にもなり、喚び戻して五十錢銀貨を遣りながら、どういふ譯で今のやうな言を云つたと聞くと、乞食は錢を握つて、

「奥様、私は今日一日貰つてあるきました、何處でも下さいません。此の五十錢も戴けなかつたら、それこそしかたなしに働く料簡になつたでせう。」

高い川

或人、積荷が重過ぎて、船縁と水際が摩れ／＼になつてゐる船を見て、

「危いものだ。此の川がもう少し高かつたら、それこそ船は沈んでしまはう。」



調子の悪い返事

貴婦人が危く難破を免れた船の水夫に、十分の同情を寄せ  
て、「お前さん大きな浪を被つた時はどんなでした。」と聞くと、  
無調法な水夫「濡れました。甚く濡れました。」

子供と學校

甲「私は子供を學校へ遣らうとする氣にならない。」

乙「それでは、君は家庭教師を頼むつもりかね。」

甲「いゝえ。」

乙「では君の子供は病氣持かね。」

甲「なに病氣持といふ譯ではない。」

乙「へゝえ。君の子供は、利口にならなくても可いといふ次

第かね。」

甲「そんな譯でもない。」

乙「それでは、君の子供を學校へ遣らない理窟は何です。」

甲「色々あるが、其の中で先づ一番大切なのは、」

乙「はて何だらう。」

甲「私に子供が無いといふ事です。」(新西洋笑府)

一三 猫

夏目漱石

吾が輩は近頃運動を始めた。如何なる種類の運動かと不  
審を抱く者があるかも知れないから、一寸説明しよう。吾  
が輩は不幸にして器械を持つ事が出来ない。だからボー

夏目漱石  
名は金之助  
文學者  
大正五年歿す



五五五五五  
六六六六六  
七七八八八  
九九九九九

ルもバットも取扱ふことが出来ない。次には金がないから買ふ譯に行かない。此の二つの理由からして、吾が輩の選んだ運動は一文入らず器械なしと名づくべき種類に屬するものと思ふ。

主人の庭は竹垣を以て四角にしきられて居る。縁側と並行して居る一邊は八九間もあらう。左右は雙方とも四間に過ぎぬ。今度吾が輩の始めた垣巡りといふ運動は、此の垣の上を落ちないやうに一周するのである。是はやり損ふこともまゝあるが、首尾よく行くとお慰みになる。ことに處々に根を焼いた丸太が立つて居るから、一寸休息に便宜がある。今日は出来がよかつたので、朝から晝までに三

遍やつて見たが、やるたびにうまくなる。もうまくなるたびに面白くなる。到頭四遍繰返したが、四遍目に半分程巡りかけたら、隣の屋根から、鳥が二三羽飛んで来て、一間ばかり向ふに列を正してとまつた。中々情状が面白くなる。是は推參な奴だ、人の運動の妨げをする。ことにどこの鳥だか籍もない分際で、人の堀へとまるといふ法があるもんか。と思つたから、通るんだ、おい、退き給へ」と聲をかけた。真先の鳥は此方を見てにや／＼笑つてゐる。次のは主人の庭を眺めて居る。三羽目は嘴を垣根の竹で拭いて居る。何か食つて來たに違ひない。吾が輩は返答を待つ爲に、彼等に三分間の猶豫を與へて垣の上に立つて居た。鳥は通



稱を勘左衛門と云ふさうだが、成程勘左衛門だ。吾が輩がいくら待つてゐても挨拶もしなければ飛びもしない。吾が輩は仕方がないから、そろ／＼歩き出した。すると眞先の勘左衛門がちよいと羽をひろげた。やつと吾が輩の威光に恐れて逃げると思つたら、右向きから左向きに姿勢をかへただけである。此の奴め、地面の上なら其の分に捨て置くのではないが、如何にせん只さへ骨の折れる道中に、勘左衛門などを相手にして居る餘裕がない。といつて、また立ちどまつて三羽が立退くのを待つのもいやだ。第一さう待つて居ては足がつぶかない。先方は羽根のある身分であるから、こんな處

へはとまりつけて居る。従つて氣に入ればいつまでも逗留するだらう。こつちは是で四遍目だ。只さへ大分勞れて居る。況や綱渡りにも劣らざる藝當兼運動をやるのだ。何等の障害物がなくてさへ、落ちんとは保證が出来んのに、こんな黒装束が三個も前途を遮つては容易ならざる不都合だ。愈となれば自ら運動を中止して垣根を下りるより仕方がない。面倒だから、いつそさう仕らうか。敵は大勢の事ではあるし、ことにはあまり此の邊には見馴れぬ人體である。口嘴が乙に尖つて、何だか天狗のまうし子の様だ。どうせ質のいゝ奴でないには極つて居る。退却が安全だらう。餘り深入りをして萬一落ちでもしたら尙更恥辱だ。



と思つて居ると、左向けをした鳥が阿呆と云つた。次のも眞似をして阿呆と云つた。最後の奴は御丁寧にも阿呆阿呆と二聲叫んだ。如何に温厚なる吾が輩でも是は看過出来ない。第一自己の邸内で鳥輩に侮辱されたとあつては吾が輩の名前にかゝはる。名前はまだないからかゝはりやうがなからうと云ふなら、體面に關る。決して退却は出来ない。諺にも鳥合の衆と云ふから、三羽だつて存外弱いかも知れない。「進めるだけ進め」と度胸を据ゑてのそく歩き出す。鳥は知らん顔して何か御互に話をして居る様子だ。愈、癩癩に障る。垣根の幅がもう五六寸もあつたらひどい目に合はせてやるんだが、残念な事にはいくら怒つ

てもものそくとしかあるかれない。漸くの事先鋒を去ること約五六寸の距離まで来て、もう一息だと思ふと、勘左衛門は申しあはせた様にいきなり羽搏きをして一二尺飛上つた。其の風が突然吾が輩の顔を吹いた時、はつと思つたら、つい踏みはづしてすとんと落ちた。

これはしくじつたと垣根の下から見上げると、三羽とも元の處にとまつて、上から嘴を揃へて、吾が輩の顔を見おろして居る。圖太い奴だ。睨みつけてやつたが、一向利かない。背を丸くして少々唸つたが、益駄目だ。俗人に靈妙なる詩の意味が分らぬ如く、吾が輩が彼等に向つて示す怒の記號も何等の反應を呈しない。考へて見ると無理のない所だ。



吾が輩は今まで彼等を猫として取扱つて居た。それが悪い。猫なら此の位やれば慥かにこたへるのだが、生憎相手は鳥だ。鳥の勘公とあつて見れば致し方がない。機を見るに敏なる吾が輩は到底駄目と見て取つたから、綺麗さつぱりと縁側へ引上げた。(吾輩は猫である)

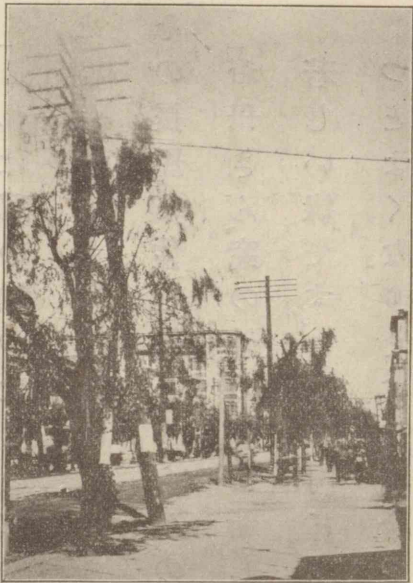
上原敬二  
林學博士

一四 町の樹

上原敬二

人通りの多い町の、二つのビルディングの狭い間に、一本の樹が生えて居た。その近くには緑の色をしたものとは何一つなかつた。生ひ茂つた葉は片側に向つて荒物屋の壁に支へられ、向側は長屋の窓の上まで伸びて居た。根本は

すつかり舗装されて居るが、それでも勢よく春になる毎に美しい新芽を萌え出して居た。



街 路 樹

「君はどうしてそんなに厄介なことをして居るのだ。若し私が君だつたらそんなことはしないね。」

ちやうどその樹の根の下に巣くつて居る老鼠が樹に話しかけた。

「いや、これが私の仕事なんだ、しなければならぬ事なんだよ。私の仲間には皆かうして居るんだ。」



「けれども一人だつて君の方に目をつけて居る人はないよ。私ばかりだ。その私でさへもあまり氣をつけはしないよ。」

「それは私の知つたことぢやない。」  
と樹はかう云つた。

その長屋に住む長わづらひの娘は云つた。

「お母さん、窓の外の樹が新しい葉を伸ばしましたよ。若若しい緑です。この町にも春が來たんですね。私もきつとよくなりますよ、請合つて。」

「あゝ有難いね。」  
お母さんは喜んだ。

夏は來た。樹の葉は大きくなつて伸びて來た。枝はそのせるか重さうに見えた。さうしてそよ／＼と吹く風に微かに動いて揺れて居た。  
例の鼠は言ひ出した。

「そんなに骨折つて居るのを見ると、ほんとに君のためかはいさうだと思ふよ。どうしてそんなに骨を折らなければならぬのかね。」

「これは皆私等のする仕事さ。仲間皆かうやつて居るんだよ。」

「けれども誰も氣をつけてくれなければ何にもならないね。」



「そんなことは私の知つたことぢやない。」  
病氣の娘はお母さんに話しかけた。

「お母さん、暑くて息がとまりさうです。この樹の陰がなければとても凌げさうにもありません。この葉摺れの音を聞くと涼しさが身に沁みるやうです。何だか大きな森の中に居るやうな気がします。美しい花、清い流、かうした夏もこの樹があればこそですよ。」

「あゝ、有り難い。」

お母さんも喜んだ。

秋はやがて來た。空は澄み渡つてひや／＼して來た。樹の葉は黄ばんで來て一枚々と落ちて行く、敷石の上はい

つかその葉で一杯になつた。ちやうど黄金の色の様に輝いて居る。すると例の鼠がまた出て來た。

「いよくおしまひだ。今までの苦みの代りに何か得る所があつたかね。」

「私はすべきことをしたまでのことだ、それで澤山だ。」

「かはいさうな木だな。せめて噛まれる實でもなつて居るならばまだしも、かうして骨折つた擧句の果が葉をふりおとしてまるはだかになると云ふは。」

「それも私の知つたことぢやない。」

長屋の小娘は話し出した。

「お母さん、お母さん、がっかりしましたの、夏も濟んでしま



つて。御覽なさい、葉は落ちるし、枝は寂しくなつて、樹ももう眠るのでせうね。私も眠くなつた。お母さん後生ですから、私がやすんだならば、あの木の葉を拾つて來て胸の上に撒いて頂戴ね。それがほんとに嬉しいんですから。」

かう云つてやさしい娘は壁の方へ寢返へりして眠りました。

「あゝ有難い。」（風景雜記）

### 一五 夏休みの一週間

七月廿一日(火) 曇。ご飯ごしらへ。

丁度五時に目が覺めた。愈、今日から、家事の實習。勝手に、行く、母様は笑ひながら待つていらつしやつた。早速襪がけになつて、水を汲む、かまどの下を焚きつける、火をおこす、その間味噌をする。ついた筈のかまどの火が消える。餘り騒がしかつたのか、赤ちゃんも眼をさます。母様はいつもとちがつて今日は少しも構つて下さらず、見てばかりいらつしやる。やうく御膳立の出來たのが七時半。これはしまつた。御飯に少し心が有る。

言ふは易く、行ふは難し。

七月廿二日(水) 晴。掃除。

七時に朝飯が濟んだ。後始末に一時間かゝつた。八時に



お掃除をした。拂ふ、掃く、拭く。濟んだのが十時。すつかり疲れた。座敷の隅は圓くは掃かなかつたが、花瓶を倒して床の間を水だらけにしてしまった。

念には念を入れよ。

七月廿三日(木) 快晴。風。洗濯。

有ることく、山のやう。岡田の姉さんの處からも練習の材料だと言つてお取寄せになつて、都合十枚の洗濯物。始めの一枚二枚は丁寧に洗つたが、段々疎略になる。腰は痛む、手は赤くなる。着て居る着物も洗濯した様に水だらけになる。母様はちよいくのぞきに來られる。みな干し並べ、見上げてほつと一息吐いた時は、滿艦飾と言ひたかつ

た。

我が身をつねつて人の痛さを知れ。

七月廿四日(金) 曇。涼しい。客來。

叔母様の御出。お手が鳴る。お茶を運ぶ。かれこれしてゐる中、兩親は中座して約束の處へお出掛けになつた。後を引受けて、叔母様の御相手は、随分苦しかつた。何も話がない。幸ひ學校の事を聞かれたので、少しは口がきけた。日頃のお饒舌も何の役にも立たぬ。三十分ばかり過ぎて母様が御歸になつたので、胸撫下した。

渡に舟。

七月廿五日(土) 晴。暑い。子守。



「ねん／＼よう。おころりよう。」赤ちやんは中々眠らない。髪の毛はなぶられる、汗は流れる。時々泣出す。こつちも泣きたくなる。見かけほど子守は樂なものでは無い。其の中赤ちやんもあきらめたか眠り出した。子を持つて知る親の恩。

七月廿六日(日) 晴。暑い。蟲干。

天氣を目がけて蟲干。かうかけならべて見ると、中々私の着物も多い。春夏秋冬が一時に一室に集つた。妹が珍しがつて、まつはつて邪魔になる。此の襦袢は伯母様からの御祝、あの袴は姉様からの戴きもの等、幾年かの歴史が一時に思ひ出されて一つの心の中にこんぐらかる。

土用干、疊の上をまはりみち。

七月廿七日(月) 曇。蒸暑い。畑作り。

朝飯前に俄百姓は裏の畑に立つた。鋤を持つ手も覺束なく、こはい様な手つきで肥料をやる。人が見たなら、さぞをかしからう。抜くより生えるが早い雑草、これからは雑草と根氣比べ、休み中は草一本もはやしては置くまい。朝飯の料にと葱を抜く。

流るゝ石に苔つかず。

一六 一兩損の裁判 大町桂月

大岡政談に、二人の正直者の話を傳ふ。若し其の話を聞き

大町桂月  
名は芳衛  
國文學者  
大正十四年歿す



て一笑に付するものあらば、其の人は眞人間をさること遠きものなり。若し、よもや事實にはあらじ、作り話なるべしと疑ふものあらば、其の人は知らずく、澆季の世の弊風に感染せるものなり。

靈岸島

隅田川の下流永代橋に近い處にある  
今は京橋區の内

江戸の靈岸島長崎町に疊屋三郎兵衛といふものありき。正直者の不愛相者にて、お世辭は微塵もなし、贅澤せりとはあらざれど、師走に押しつまりて、如何にしても無かるべからざる金三兩、和泉橋邊の出入場にゆき、頼むより早くいさぎよく貸し與へられたるも正直の餘徳、これにて年も越さるべしと安心して歸り來り、懷を探るに、入れたる筈の金はなし、袂をふりても無し。「さては路に落したるに相違なし。

和泉橋  
神田區にある

し。折角借りたる金を落すとは、よく／＼金の運の拙きなり。この上は唯一生懸命に働くの外なし。」と、江戸兒の本性思ひ切り善く愚痴をこぼさず、悔みても返らぬ事を悔みもせず、平生よりも一層勇氣を出して、孜々と稼ぎたり。

小傳馬町

日本橋區にある  
三味線堀  
淺草區にある  
柳原  
神田區にある

小傳馬町に建具屋長十郎といふものありき。三味線堀へ所用に行き、柳原の土手下にて、ふと紙に包みたるもの、落ちたるを見る。取上げて、其の中を調ぶるに、三兩あり。「落し主は、さぞや困り居るならん、送り届けざるべからず。」と決心したり。それも金を白紙に包みたるならば、落し主を捜す手掛りもなければ、幸にも三郎兵衛は他より、貰ひたる手紙に包み置きたり。手紙の宛名は、疊屋三郎兵衛。落し主



の職業と名は知れたるなり。長十郎、三兩の金の落し主を  
 捜さんとて、草鞋を穿き、腰に辨當を付け、いづれもなにかさらでだに忙しき  
 節季師走、我が身に職業あれど、人の難を黙視して居られず、  
 「疊屋三郎兵衛といふは居らぬか、若しも落し物はせぬか。」と  
 江戸八百八町を隈なく尋ね歩く。  
江戸の新七やなあるく

一日又一日、四五日は空しく過ぎぬ。たまく、疊屋三郎兵  
 衛といふものあるかと思へば、落し物はせぬといふに、さて  
 落し主にあらざるかと、尋ねに尋ね、探しに探して終に靈岸  
 島長崎町疊屋三郎兵衛を探し當てたり。「落し物はせぬか。」  
 と問へば、主人は暫し考ふる様子なりしが、女房娘がさし出  
 てて「先日金を落せることを忘れられしか。其の金高は三

兩、疊屋三郎兵衛といふ宛名のある手紙に包めるもの」とい  
 ふに證據は十分なり。「受取られよ。」とて金を出すに、三郎兵  
 衛は承知せず。「金を落すと云ふは、金の運の無きもの。拾



大町桂月

はれたる其方は、金の果報者、天の  
 授けたるなり。その金は、其方の  
 金なり、我が金に非ず。殊に數日  
 間も探しまはられたりと聞きて  
 は甚だ氣の毒なり。其方が持ち  
 て歸られよ。」といふ。「いや、拾ひたる金を取るやうなら  
 ば、斯く辛苦して探すことはせざるべし。我が心盡しを察  
 して其の金を收められよ。」といなむ。いふまでもない「いや受取らぬ。」いや



持ちかへらぬ。」と果てしもなければ長十郎は金を投出して  
 立出でんとす。三郎兵衛飛出して長十郎の襟をつかみ「こ  
 の無禮者め。」と鐵拳を揮ふ。「この愚か者。」と打返す。氣早き  
 江戸兒肌の職人同士、正直だけに激怒し易く、初めの好意は  
 何處へやら、親の仇にめぐり會ひたらんが如き大喧嘩。  
 喧嘩だ、喧嘩だ。」と行人の立ちどまり、家主の出でくる、名主まで  
 も引き出されて漸く二人を引分けたれど、始末のつかぬは、  
 金三兩なり。止むを得ず、名判官の聞え高き大岡越前守に  
 訴へ出でたり。

越前守は二人の言ふ所を聞きて、今の世の中にもかゝる正  
 直者もあるかな。」と感歎に堪へず。「追つて沙汰すべし。」とて  
 其の日はそのまゝ歸らしめ、數日經て再び呼出す。白洲に  
 は他に多くの罪人居並べり。越前守判決を下して曰く「二  
 人の金を譲り合ふことは、一代の美談なり。三兩の金は官  
 に收め置き、改めて官より金四兩を下し遣はさる。之を二  
 人にて等分せよ。」と、二人問うて曰く「もとの金三兩なり。  
 之を等分すれば、一兩半なるべきに、二兩づつ分て如何  
 なる事にや。」越前守答へて曰く「三郎兵衛は三兩落して二  
 兩となる、一兩の損なり。長十郎は三兩拾ひて二兩となる、  
 一兩の損なり。我も餘りの殊勝さに一兩を損して、兩人に  
 つかはすものなり。」と。兩人納得して退く。一兩損の裁判  
 とて世に名高くなりぬ。これより三郎兵衛と長十郎とは、



意氣相投じて、極めて親しく相交れりとぞ。三兩の金にて裁判を煩はしたるを心なすと謂ふことなかれ。渡せ渡さぬにて訴訟は起るものなるに、受取れ受取らぬの訴訟は世にも珍しき事ならずや。好意の餘りて喧嘩に及びたるも笑ふなかれ、金を辭退する喧嘩は、世にも潔きことならずや。二人の譲るや善し、其の喧嘩また善し。其の間に潔き本色も見えて床しからずや。(桂月百話)

一七 明治天皇の御遺物

笠井信一

先月十七日、宮中より地方長官一同に午餐を賜ふ旨仰せ出されましたにより、私共は定刻に參内致しました。先づ權

笠井信一  
當時慶手縣知事  
であつた  
貴族院議員  
先月  
大正二年一月



明治天皇

殿參拜の後、御學問所を拜觀致しました。御學問所は表御座所とも申し上げ、萬機の政を御親裁遊ばされる處でございます。餘り廣くない二間續きの御室で、瀟洒たる檜の白木造ではあります。別段これと申す御裝飾も施してございませぬ。御室は三方壁を以て周らし、南の一方に硝子戸があり、御机は御座所の中央に南向に据ゑてございます。私は御室の御構造を拜觀すると同時に、夏分は嘸御暑い事ではいらせられたであらうと感じました。それにつけても、



年々に思ひやれども、山水を

汲みて遊ばん夏なかりけり。

の御製を想ひ起して、恐懼に堪へませんでした。のみならず、此の御室にはストーヴの御設備はございませんけれども、三十七年の冬以來、如何なる酷寒（クワム）と雖も（レドモ）一切御用ひがない。これは侍従方の推測し奉る所によれば、當時皇軍が滿洲の野に大敵と戦ひ、飢寒に苦しんでゐるのに御同情を垂れさせられた次第でありませうと申すこととて、そしてそれ以來は、唯一箇の小さい丸火鉢のみを御使用遊ばされたとの御事。今その御火鉢を拜觀するにつけても、思ひ出されるのは斯民の上を思ひやられた御製、

桐火桶かきなでながら思ふかな、

すきまおほかるしづが伏屋を。

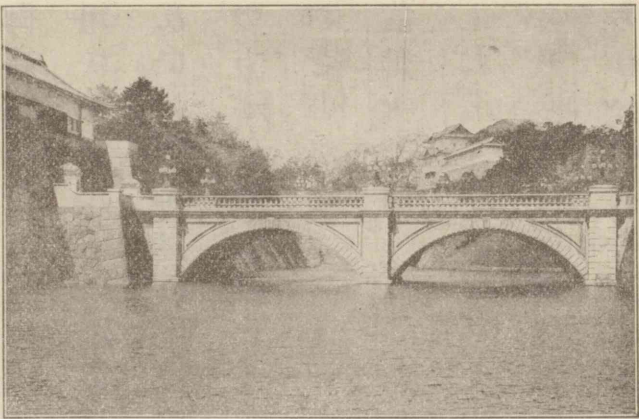
でございます。

次に御遺物全部が其の儘に据置かれてある御別室を拜觀致しました。構造も方向も廣さも御學問所と全く同一であつて、すべての御遺物も昨年七月十三日、即ち先帝最後の出御當時のまゝに御備付になつてございます。床の間には其の當時の御軸物が掛けてあり、其の前方には御劍數振横たはり、御机は中央に南面してございます。まづ、御机は羅紗を鏡張にしたテーブルで、中程に焼痕がございます。是は先帝が御煙草を召上つて入らせられた節、



臣下より政務<sup>マツリゴト</sup>を言上致しましたので、先帝には御吸ひかけの御煙草をテーブルの上の或物に横たへて、熱心に御聴取あらせられた折、煙草の火が墜ちて此の焼痕がついたのを、侍臣より幾度か御取換を願ひ出ましたさうでございませが、<sup>ナフして</sup>断じて御許がなかつたとの御事。

御硯箱は明治二十年に鹿兒島縣から御取寄せになつた竹製の品でございませ。そのなかの筆は普通の御品で、毛尖は禿び、軸の文字は見えないほどに御使ひふるしに成り、墨も亦同様で、一寸位にへつてをるのがございました。銚も亦同じく普通市場にある品で、其の傍に日常御用ひになつた學校生徒等の用ひる普通のインキがございました。事



事物々につけて御儉徳の高きに感激し、自ら顧みて慙愧<sup>ハズカシ</sup>に

堪へなかつた次第でございませ。

御椅子の下に犬の皮で補修<sup>キリ</sup>され

ニ た古い獅子の毛皮が敷いてござ

いませ。其の傍にホワイトシャ

重 ツを入れる白いボール箱が澤山

に積み重ねてございましたが、こ

橋 れは書類を入れるに便利である

とて御手許に留め置かせられた

ものであるとの事でございませ

た。大臣方より上奏して御裁可を願ふ書類は紙袋に入れ



て、表に主務者の名を署して上るのなさうでございませうが、御親裁の後は、別の紙袋に入れて御下げになる、そして御不用になつた前の紙袋は一枚たりとも御棄て遊ばされず、それに折節御詠み遊ばす御製を御認めになりますのを御側の方が別紙に拜寫して、御歌所に御廻し申したのなさうでございませう。

儲、御次の間には造花や彫刻や種々な物が備へてございませう。之を拜見いたしまするに、學校や展覽會等に行幸あらせられた節、御獎勵の爲、御持歸り、又は、御買上げにならせられた物らしうございませう。それ故に、造花の如きも格別のものではなく、何年前のものか、色も褪めはて、殆ど裝飾の

用を爲さぬものまで、其の儘になつてございませう。その他美術工藝品の如きも、皆御獎勵のため、世の常の嗜好とは全く趣を異にしていらせられます。

千よろづの民と偕にも楽しむに

ます樂みはあらじとぞ思ふ。

の御心も思合されました。

今や我が國運は先帝の長き御心づくしの御蔭を以て隆々として進歩し、我等は世界一等國の民となりました。顧みれば、我等は長い間、聖天子御一人に非常なる御心勞をお掛け申し上げたのでございませう。こゝに御遺物拜觀の光榮を拜謝するに當り、更に、



自らの誠意  
なりはひはよしかはるとも國民の、

おなじこゝろに世を守らなむ。

の御製をも同時に服膺して、力のあらんかぎり<sup>毎分</sup>を盡し、以て  
「我が日の本<sup>毎日</sup>のまもり」のため、應分の貢獻<sup>ミツケ</sup>をなし、先帝の御高  
恩の萬分の一に對へ奉らうと考へる次第でございます。

(巖手縣學事彙報)

八波則吉

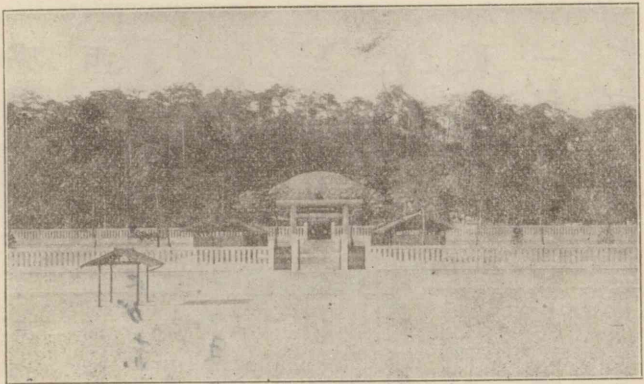
國文學者  
當時は第四高等  
學校教授  
現在は第五高等  
學校教授  
この文は御大葬儀  
後間もない時の  
もの

一八 母に

八波則吉

母様。豫定の如く昨朝八時無事に歸宅致しました。  
一昨日桃山の停車場から繪葉書で御知らせ申しまし  
た通り、此度學校の職員生徒合せて六百三十餘名、桃山

御陵を參拜しました。特別仕立の列車でしたから、途



中は只四五箇所の大きな驛に停  
車したゞけで、多くの驛は抜きに  
桃したしたのは、北陸線では私は始めて  
の經驗でした。月明かに星稀に、  
山 氣は澄み心はさえて、終夜何とも  
御 形容の出來ぬ一種清爽の思に満  
陵 ちました。是も私には幾十回の  
旅行に曾て覺えないこととし  
た。

明け方京都で奈良線に乗りかへました。今しも東山



東の野に  
柿本人麿の歌

の巔に登る朝日の姿。雄大、莊嚴、言語に絶した壯美の  
感に、吾知らずあつと申しました。顧みれば月はなほ

西の空に淡い光を放つてゐるのでした。

東の野にかぎろひの立つ見えて、  
東の野にかぎろひの立つ見えて、  
また西の野には生た月かある。

かへりみすれば月傾きぬ。

といふ古歌もなるほどと合點されました。

桃山の停車場に着くや否や、私の胸を衝いたのは祭場  
殿の設けてした。廣庭、白砂、假小屋、幔幕、凡そ是等を只  
一目見た時、私の胸は急に詰つて、眼鏡は忽ち曇つたの  
です。御聞遊ばせ、靈柩を奉安して傾斜鐵道によつて  
御陵の御須屋に移し奉つたと承る其の折の臺車も、軌

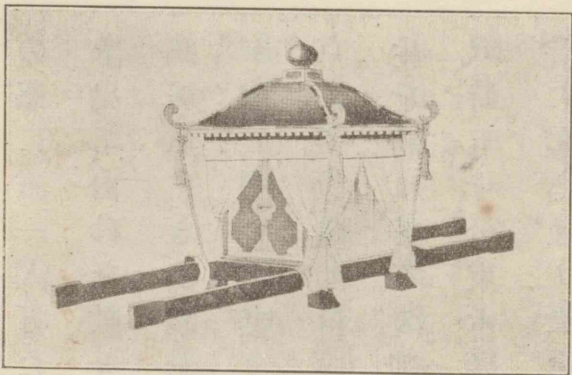
道の一部分も、目前其處に据ゑおかれてあるではござ

いませんか。

母様。御陵を參拜してまづ何よ  
り先に思ひましたのは、母様と御  
一緒に參拜したいといふこと  
でした。

日に幾萬といふ參拜者で、それは  
それは大した人です。子を連れ  
た親、親の手を引く子、私は是非御

一緒にと思ひました。どうぞ御達者でいらしつて下  
さい。來春は必ず御供致します。





葱華輦きょうわらんを拜見したゞけても非常に深い感じを起しました。まして遙かに御須屋を禮拜した瞬間、森嚴崇高の感に誰一人打たれぬものがございませう。竹の林を出て、白砂を敷きつめた御陵の廣庭に立つて、松青く鳥居眞白き山陵を伏し拜めば、知らず識らず敬虔けいけんの情が胸に漲つて参ります。

京都で數時間自由散歩の時間を得ましたから、藤井先生を訪ねて、その御案内で下鴨へ参詣しました。夜の八時五十分東本願寺に集合して、九時過、再び夜行で歸途に就きました。六百餘名が蜘蛛の子を散らしたやうに京都の市中で別れましたが、定刻には一人も後れ

藤井先生  
京都帝國大學教  
授文學博士藤井  
乙男  
下鴨  
官幣大社下鴨神  
社  
京都市上京區下  
鴨町に鎮座

校長  
當時の第四高等  
學校長溝淵進馬

ず集つたのです。金澤の停車場前で、校長が一行に對して滞りなく参拜を遂げたことを喜ぶ旨を心から愉快さうに述べられました。そして解散したのです。桃山には繪葉書屋が何百となく軒を並べてゐました。土産物は繪葉書が重なやうです。そして繪葉書には必ず乃木大將のが付きものになつてゐます。尤なことです。乃木大將の御墓が御陵の附近にあつたらと思ひました。左様なら。御機嫌よう。(趣味と修養)

一九 乃木大將夫人

乃木大將が精忠無二の偉人として、兒童走卒ウツクツにまで崇たかめら



西那須野  
栃木縣那須郡

れると共に、夫人は貞淑並びなき烈女として千載の末までも女性の鑑と仰がれるであらう。

夫人は極めて質實勤勉な方であつた。平生物見遊山などは少しもせられず、儀式などの特別な場合の外には、一切絹物を身に着けられなかつた。かの西那須野の別荘に居られた時は、いつも田畑へ出られて、農夫を指揮せられるは勿論の事、自身にも鋤鋤を執つて働かれた。食時頃訪問の客が有れば、夫人みづから豆腐汁に鱈の鹽焼といふやうな料理を拵へて饗應されるのが例であつた。「人様が來られたとて、急に變つた旨い料理を註文するのは馳走にはならぬ。總べて身分相應な物を自身にこしらへて出すのが眞の馳

走である。」との姑御の教を守られたのであるといふ。そして、前掛様の物を不斷着の上に纏ひ、かひなくしく臺所で立働き、自身膳を座敷に運ばれるのを見る客は、誰でも夫人の



乃木夫人

心盡しに感ぜぬものは無かつた。

夫人は、又非常に謙遜な方で、少しも容體ぶるやうなことも無く、誰にも親切で、慈悲深かつた。

殊に大將の部下の者に對しては、厚い同情を以て世話をせられたので、いづれも大將の威徳に心服する外、夫人の恩義に一方ならず感謝してゐた。近處の商人や、其の他、出入の

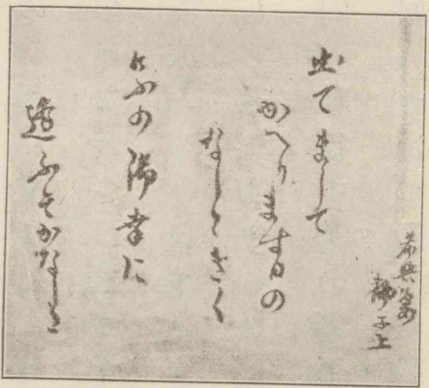


人々にも、隔意なく氣輕につき合はれるので、誰も彼も皆よく懐き慕つてゐた。書生や下女や馬丁ハライを呼ぶにも、決して呼捨てにされたこと無く、ついぞ荒らかに叱られたことも無い。萬事が斯ういふ風であつたから、凡そ夫人に接する人といふ人は、いづれも其の高い温かな人格に感動せぬ者は無かつた。

勝典・保典二兒の教育は、大將が身軍職にをられる關係から、家に居られないことが多いので、夫人が専ら之に當られた。武士の精神を養ふを第一とし、剛健な身體を鍛へるのを第二とし、諸般の學識を得るのを第三として、家庭教育にも學校教育にも眞心を籠められた結果、あの立派な二人を作り

出されたのである。此の一點から見たゞだけでも、夫人が尋常一様の女性でなかつたことが分る。

希典妻  
静子上  
出てましてかへ  
ります日のない  
ときくけふの御  
幸に逢ふぞいな  
しき



乃木夫人筆蹟

然るに、この愛兒は明治三十七八年戦役に二人とも名譽の戦死を遂げた。この時の夫人の胸中はその如何であつたらう。並の母親であつたなら、身も世もあられず、嘆き悲しんで、氣も狂つたかも知れない。然

るに、夫人は吾が子の御國の御用に立つたのを喜ばれたゞけて、大將の言ひ置かれた様に、三棺揃はねば葬儀は出さぬと、涙一滴人に見せられなかつた。立派な武夫モソフになれかし



陽 重風 山川草木轉 荒涼 征馬不進 人不安 語金洲城外 立碑

琴平神社  
東京市芝區琴平  
町にある

と神に念じ、佛に祈り、吾が手一つに育てあげた前途有望の二人の子を二人とも喪つて、誰が悲しくなからう、心細くなからう。それを、國を思ふより外なき大將の妻として、御國の御用に立つたと喜んで、己が悲をじつと怵へられた夫人のけなげさは、吾が子の戦死した地點に立つて、山川草木轉荒涼とのみ口ずさんで泣かれなかつた大將に優るとも決して劣りはせぬ。

同じ戦役中芝の琴平神社に日參して、我が軍の勝利を祈る婦人があつた。服装の質素なのに似ず風采の氣高いのと祈願に熱心なのとを見て、何れ然るべき軍人の妻女ではあらうが、果してどなただらうと、神職等が密かに探つて見た。

谷子爵  
谷干城

處がそれが乃木大將夫人だと知れて、皆々儲はと大に感じ合つたといふ。

谷子爵等の發起した報國會には、夫人は其の會の理事として働かれ、又會で恤兵の爲に襯衣を縫ふことゝなつたところ、夫人は日々一生懸命に其の裁縫に勵まれた。そんな時にも、夫人は口癖のやうに、「夫が旅順で澤山將卒を殺し、誠に陛下や父兄に相濟まぬ。」と語られたといふことである。「愧づ、我何の顔あつて父老にまみえん。」と歎かれた大將と實に同心一體ともいふべき美談ではないか。

大將の自殺は忠魂義膽の凝固りて、夫人の殉死は良人に對する同情貞節の一徹心である。これが眞に優しい、女らし



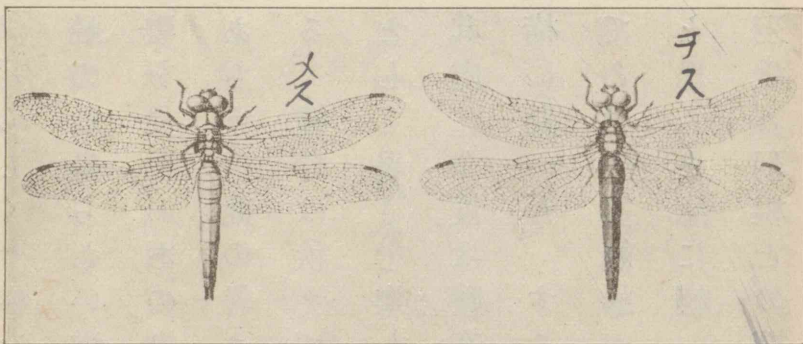
い、而も凜とした日本婦人の鐵石心を發揮したものである。ともすれば、婦道の廢れようとする今日、夫人の如きは實に無上の活教訓を示された方と謂ふべきであらう。

志賀直哉  
文學者

二〇 蜻蛉

志賀直哉

暑い。今年の暑さは不自然にさへ思はれる。庭の紫陽花が、木一杯に豊かにつけた美しい花を、さも重さうに垂れて居る。八手は葉の指を一つ／＼上へつぼめて、烈しい太陽の熱を避けよう／＼として居る。今年八手の根元に植ゑた鬼百合は、まさかこれ程の暑さが来ようとは思はなかつたのだらう、ひよろ／＼と四五尺も延びて、いまはそれを後



ぼんとらわぎむ

ぼんとらかほし

悔して居る風である。莖は蕾の重みに堪へず、蕾の尖つた先を陽炎の立ち昇る乾いた地面へつけて、じつとしてゐる。それは死にかゝつた鳥のやうに見える。麥藁蜻蛉が飛んで來た。蜻蛉はかん／＼照りつけられて苔も何も着いて居ない飛石へ來てとまつた。そしてしばらくすると、其の暑さの



中に満足らしく羽根を下げた。自分は一月程前、庭先の溝で蜻蛉の幼蟲らしい醜い蟲が、不器用に水の中にもぐつて行く姿を見た。あの蟲が殻を脱けて、かうして飛んで來たのであらう。此の暑さにもめげない蜻蛉の幸福が思ひやられる。蜻蛉は秋までの長くもない命を少しもあせらず、じつとして暑さを楽しんで居る。凡そ十分もさうして居た。其處に今度は鹽辛蜻蛉が飛んで來た。黒い影が地面を縦横に動いた。すると今までじつと羽根をへの字なりにしてゐた麥藁蜻蛉が、眼ばかりの頭をくるくると動かし、と思ふと、急に軽い速さで鹽辛蜻蛉を眼がけて飛立つた。羽根と羽根との擦れ合ふ乾いた音がして、二匹の蜻蛉

は追ひつ追はれつ次第に空高く飛んで行く。そこにはもくもくとしたまぶしい夏の雲があつた。蜻蛉は暫くの間淡い點になつて、見えて居たが、たうとう私には見えなくなつた。  
(白樺の森)

徳富健次郎

文學者

蘆花と號す

昭和二年歿す

二一 秋分

徳富健次郎

朝

今日は秋分なり。

早起、外に出づれば、白露地に滿つ。稻穂・粟穂・薄の花・蘆の花  
 すべて露の中にあり。蟲聲水のごとく流る。

晝



彼岸の中日なれば、近在の老弱男女、藤澤に鎌倉に寺詣して  
歸る者織るが如し。川邊には鯨を釣る人多く並び立てり。  
午後の日悠々として、碧潮川に満ち、日光空に満ち、百舌鳥の  
聲耳に滿つ。

夕

日は入りぬ。無花果の葉蔭薄暗くなりて、芙蓉の花も漸く  
凋まんとす。空に雁聲あり。

十五夜に影を見せざりし月は今宵照りいでぬ。庭の眞砂、  
霜の置けるやうに白み、樹影黒く地に涌きぬ。白萩月に映  
じて雪の如し。(自然と人生)

二二 海の上より

水上瀧太郎

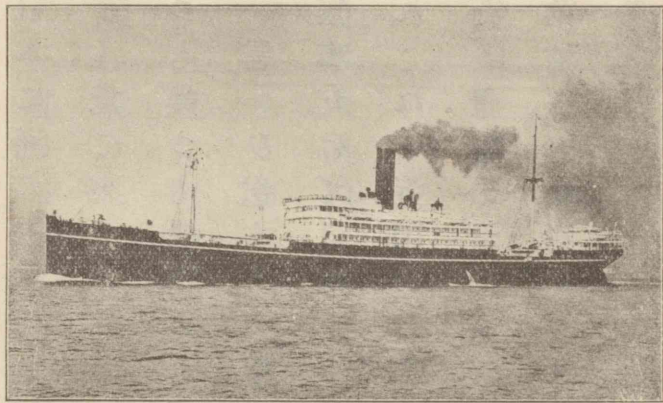
水上瀧太郎  
本名阿部章藏  
實業家  
文學者  
父  
阿部泰藏  
前明治生命保險  
株式會社長  
今日  
大正元年十月三  
日

日本に通じる無線電信は今晩でおしまひだと、電信局の人  
が注意に来てくれた。「カウカイブジ」といふやうなのが、幾  
つも幾つも繰返されて居るのである。自分も父母に、何か  
一言いひ送らうと思つたが無事といふ以外に何も無く、唯  
無事だけでは、あまり物足りな過ぎるので、手帳を出して、あ  
れこれと近頃の自作の歌の中から適當なのを選ぼうとし  
た。景樹の流れを汲んで和歌を詠まれる母は、自分たち兄  
弟姉妹が、時折父母の家を離れて、旅にでも出た時とか、又は  
母自身が家を留守にした時には、必ず吾等に對して、子を思  
ふ親の心を三十一文字に籠めて書き越されるのであつた。

景樹  
香川景樹



見やう見まねで、兄も姉も、幼いときから歌を詠み習ひ、母か



ら送られた時には返しをすといふ風であつた。自分も何時しかそれに倣つて、旅好きの身の旅先から強ひても母の好きさうな古風な歌を詠み出でては書き送るのを習とした。

母が誇りかに、人々の前に、それを示すかを想像しながら九

州路の旅に日を暮した。

それこれを考へ合せて、幾度も、短いありふれた句を手帳に書いては消し、消しては書きした後で、

ヤスラカニウミノイクヨハアケニケリ

チチハハノイヘコヒシトオモヘド

として、恰も晚餐の時刻に我が家に着く様に、無線電信掛の人に頼み込んだ。

晚餐時にこれが着くと、父は、なんだつまらないと云ふ様な顔をして見られるに違ひない。しかし、その心中の嬉しさは隠さうとしても隠し切れず、見ない様な風で居ながら、電報の歌を諳んじられるに違ひ無い。母はもうたまらなく



なつて、目顔目のほりに涙を滲ませながら、幾度もくく口吟んだ後、妹にも弟にも、さては女中たちにもまでも讀み聞かせられるに違ひ無い。明日からは、彼の家の夫人、その家の奥さんたちに逢ふ度毎に、我が子の歌を唇に上せられるに違ひ無い。自分にはよくそれが見えるのであつた。(海上日記)

西條八十

二三 芙蓉の花

西條八十

おそろしきなる  
大正十二年九月  
一日關東大地震

おそろしきなるも去りたり。  
静かなるわが家の庭に  
今日も咲く芙蓉の花よ。

わが兒らは何時もの如く  
おりたちて砂ほり遊ぶ。

今日のみは、嗚呼わが兒らよ、  
その赤き鋤ををさめよ。

おそろしきなると焔ほとに  
あまた世の幼兒どもは  
親の手に抱かかれて亡せぬ。

その小さき鋤を見るだに

二三

芙蓉の花

二五



あはれなる葬はかりを偲ぶ。  
わが胸はいま痛むなり。

今日のみは、嗚呼わが兒らよ、  
つゝましく傍かたはらに坐して  
亡き友のために祈れよ。

あはれ幸さいうすきその魂ぞ、  
かの白き芙蓉のごとく  
うるはしく穢けがなかりし。(噫東京)

萩野由之

國學者

文學博士

東京帝國大學教

授

大正十三年薨す

保昌

丹波大和攝津等

の國守に歴任し

た

長元九年(六一三)

卒す

年七十九

源賴信

滿仲の子

賴光の弟

鎮守府將軍

永承三年(一一七〇)

卒す

二四 保昌と袴垂

萩野由之

藤原保昌といふ人は大納言藤原元方の孫で、母は醍醐天皇の御孫であつた。だから身分も立派な人であるが、柄に似合はず力が強く、武藝に勝れて、源賴信等と同じく武勇を以て知られてゐた。當時の風習は、文官でも、武人でも、高尚な人は皆音樂の嗜があつた。中でも保昌は殊に笛が上手であつた。

夜中は既に過ぎて、町々は皆寢静まつた頃であつた。保昌は月の光の皎々たるまゝに、興に乗じて例の笛を取出し、これを吹きつゝ家路についた。此の時の保昌の心は笛の音が月と共に澄渡つて、その音律が自然に通ずるのを喜ぶほ



かには何物も考へなかつたであらう。眼に入るものは、月と我との外には何物もなかつたであらう。まして強盜がぬき足さし足で背後から切りつけようなどは夢にも知らなかつた。

當時は警察制度の不備な爲に、京都の市中には強盜追剥の類が甚だ多かつた。中には隊を組んで人家に押入る者さへあつた。これらの輩の巨魁に袴垂といふ者があつた。そろ／＼夜寒になつたから、一かせぎして衣服を調達しよう、ある夜ひそかに市中を鶉の目鷹の目。折しも一人の士が美しい衣服を着て、従者も連れず、唯一人、しかも夜中すぎに、笛を吹きながら徐行するのを見出した。「あゝ、よい椋



鳥がかゝつた。これこそ着物を我にくれる爲に來たやうなものだ。」と喜んで尾行した。然るに彼の士は一向知らぬ風で、依然として笛を吹きながら徐行する。少しも氣附いた様子がない。袴垂もさすがに不審に思つて、手出しもせず、そのまゝ十餘町ついで行つたが、やはりかの士は笛を樂しみながら歩いて行く。袴垂は臆して手が出ない。



袴垂が心を取直して、一思にと刀を抜いて走りかゝると、彼の士は始めて笛を止めて立止まつて、「何者だ。」と一喝した。さすがの袴垂も魂を失つたやうになつて、もやは逃げも匿れも出来ぬと観念したから、「私は追剥で、袴垂といふ者でござる。」と答へた。その時彼の士は、「さやうな者が居るとは聞いてゐた。さあ、おれについて来い。」と、また笛を吹きながら歩いて行つた。袴垂もその態度應答の工合で非凡な人だわいと思ひ、鬼神にでも捉まつたやうに、畏るゝ隨行した。やがて大きな門のある家へ入つた。彼の士は再び出て來た。そして綿入の衣服を袴垂に取らせて、此の後うっかりした事をして過ちするな。」と言ひ含めて歸らせた。袴垂は

生き返つたやうな心地がしてその家を立去つた。この士が即ち保昌であつたのだ。

其の後袴垂が他の犯罪で捕縛された時、今までに恐しかつた事が唯一度ある。それは月夜に笛を吹いて通つた人をねらつた時であつた。」と物語つたと云ふ。

世に武將の四天王として、一に頼光、二に保昌、三に貞道、四に季武と數へるが、平貞道や平季武は源綱坂田公時と共に頼光の部下の四天王で、保昌と肩を比べる人ではない。頼光は武將として保昌と匹敵するが、保昌のやうな優美の點が缺けてゐるやうに思はれる。頼光が市原野で鬼童丸を殺したのは、彼が武勇談の一つであるが、その時は綱や貞道が

頼光 源満仲の子  
東宮大進  
治安元年(二六二)  
卒す  
貞道 村岡五郎貞道  
季武 卜部六郎季武  
秀國の子  
治安二年(二六三)  
歿す  
源綱 年七十三  
渡邊綱  
坂田公時  
通稱主馬助  
市原野  
又樺原野  
京都府愛宕郡鞍馬の山口



隨行したのであつた。のみならず、強盜一人を二人がかりで切殺したのである。保昌が月下の笛に心を澄まして、袴垂が月の雲隠を伺ひつゝ近寄つたのを知らぬ態度の大きさは、また格別ではあるまいか。  
(史談と文話)

二五 箱根路

正岡子規

箱根路へかゝれば何となく行脚の心の中うれしく、秋の短き日は全く暮れながら、谷川の音耳を洗うて、煙霧模糊の間に白雲光あり。湯本に辿り着けば、一人の男袖をひかへて、いざ給へ、好き宿

正岡子規  
名は常規  
文學者  
俳句の大家  
明治三十五年歿

まゐらせん。」といふ。引かるゝまゝに行けばいとむさくる



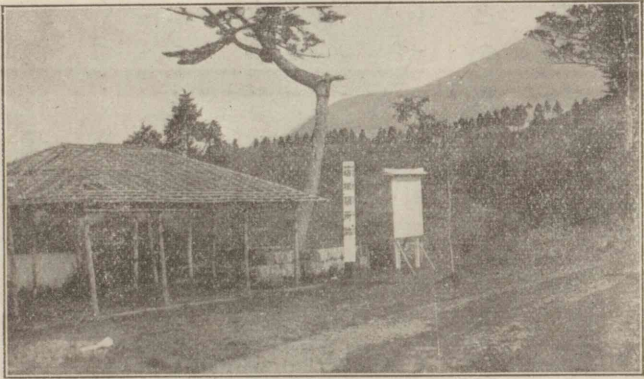
箱根の舊街道

しき家なり。前日來の病も全く癒えぬに、此の旅亭に一夜の寒氣を受けんは氣遣はしく、やゝ躊躇したるが、まゝよ、これこそ風流の本色、行脚の眞面目なれと、そのままこゝに宿りぬ。つぎの日まだき起き出でつ。板屋根の上の滴る許りに濡ひたるは昨夜の雲のやどりにやあらん。よもすがら雨と聞きしも、篋の音、谷川の響なりしものと、



はや山深き心地ぞすなる。  
 今日は一晴渡りて、瀧の水朝日にきらめくに、鶴鶴の小岩  
 傳ひに飛び歩くは、逃ぐるにやあらん、此方へとするべする  
 にやあらんと、草鞋の運び自ら軽らかに、箱根街道登り行け  
 ば、鶯の聲左右にかしまし。  
 病みつかれたる身の一足のぼりては一息つき、一坂のぼり  
 ては巖端に尻をやすむ。駕籠舁の頻に駕籠をすゝむるを  
 耳にもかけず行けば、はや二子山鼻先に近し。谷に臨める  
 かた許りなる茶屋に腰掛くれば、枯皺みたる老婆の挨拶何  
 となくものさびて、面白し。打見やれば千仞の谷間より木  
 を負うて上り来る樵夫二人三人ものもえ言はで汗を滴ら

すさまいとあはれなり。樵夫も馬子も皆足を茶屋にやす



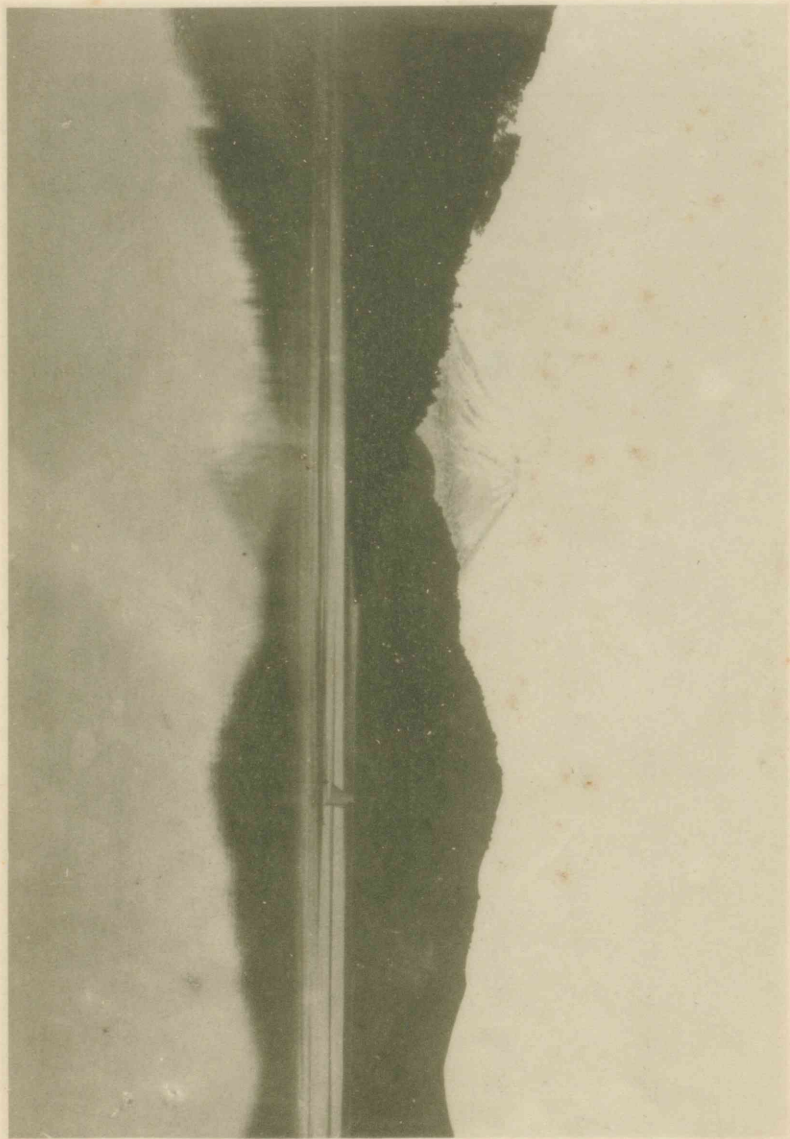
箱根關所址

むるに、それぐいたはる老婆の  
 なさけ、一椀の濃茶よりも猶濃し。  
 名物ありやと問へば力餅といふ  
 ものありとて、大きな餅の焼き  
 たるを二つ三つ盆に盛り来る。  
 力餅の力をかりて上ること一里  
 餘、杉櫓の太木道を夾み、元箱根の  
 一村目の下に見えて、秋さびたる  
 けしき、仙境に入りたる如し。

幾重の嶺を攀ぢ、幾片の白雲を踏みて、上り着きたる山の頂



に、鏡を磨き出せる蘆の湖を見そめし時の心ひろさよ。餘りの絶景に恍惚としてえも立ちやらず、木の株に坐してつくづくと見れば、山更に静かにして風吹かねども、冷氣冬の如く足もとよりのぼりて身にしみわたるこゝちす。波の上を飛びかふ鶺鴒は忽ち來り忽ち去る。秋風に吹き惱まされて力なく、水にすれつあがりつ、胡蝶のひらくと舞ひいでたる、箱根の頂とも知らでやあらん。遙かの空に白雲とのみ見つるが上に、兀然として現れ出でたる富士こゝよりも猶三千仞はあるべしと思はるゝに、更に其の影を深く沈めてさゞ波にちゞめよせられたるさま、またなくをかし。箱根驛にて午餉したゝむるに、皿の上に尺にも近き魚一尾



湖の蘆



富士の裾野

あり。主人誇りかに、こは湖水の産にして、こゝの名物なり。といふ。名を赤腹といふとぞ。

これより山を下るに、見渡すかぎり皆薄なり。金紋先箱の行列整々として、烏毛片鎌など威勢よく振りたて、行きかひし街道の繁昌も、あはれ、物の本にのみ残りて、草薙る童のゆき通ふ小路一筋を除きて、外は、草の生ひ出でぬ處もなく、纔かに行列のおもかげを薄の穂にとゞめたり。槍立て、通る人なし、花芒。

(子規全集に據る)

### 二六 富士の裾野

若山牧水

灌木林を抜けて美しい野に出た。

若山牧水  
名は繁  
歌人



野は唯一面の平野ではない。さながら大海の中に出て見  
るうねりの様に無数の柔かい圓い高みがあつて、高みは高  
みに續き、はてしなくゆるやかに續き下つて、其處に無縫無  
碍の裾野を成してゐるのである。その一つ／＼の小高い  
うねりのいかばかり優しく美しいことか。一帶の地面に  
は青い芝草が生えてゐる。東京の郊外の植木屋などが育  
てゝゐる芝である。その芝の中に松蟲草が伸び出て濃紫  
の花を咲き盛らせ、その花よりなほ丈高く輕やかに抽んで  
咲いてゐるのは芒である。この草ばかりが茂りに茂つ  
て、上に咲き揃つたその穂などは、まるで厚い織物の様に見  
えてゐる所もあつた。或窪みには芒が茂り、或高みには松

蟲草が咲き、その二つが相寄り相交つて咲き擴がつてゐる  
ところもあり、それがさきからさきへと續いて、美しい、つや  
のある大きなうねりを輝かしてゐるのである。

富士山はこのうねりの野の端から端に臨んで、唯大きく近  
く聳えてゐた。私はかねてからかういふ感じを持つてゐ  
た。「多くの山もさうだが、殊に富士山は遠くからのみ見る  
べきだ、近づいて見る山ではない。」と。要するに、それも眞實  
に近づいて見ぬひがごとであつた。かうして、この日仰い  
だ富士は全くの眞裸であつた。あたりに一片の雲もなく、  
唯或一點だけ萬年雪の残つてゐる外は、頂上近くにすらま  
だ雪を置いてゐなかつた。頂上からこの野の涯の根がた



まで、たゞ赤裸々にその地肌を露はして立つてゐるのみで



年月といふものを超越した山にも見えた。殊にあたり

ある。ことに其處からは世にいふ森林帯の山麓にたゞ僅かにあるかなきかの樹木を一わたり置いてゐるのを見るに過ぎぬのであつた。このあらはな土の山、石の山、岩の山が寂として中空に聳えてゐる姿を私はまことに如何に形容したらよかつたであらう。生れたばかりの山にも見え、全く

はどれ一つこの山と手を取つて立つてゐる山もないのであつた。地に一つ、空に一つ、何處をどう見ても、たつた一つこの眞裸の山が、嶺は柔かに鋭く聳えて天に迫り、下はおほらかにしかも嶮しく垂り下つて大地に根を張つてゐる。前なく後なく、西もなく東もない。

山に見入つてゐた瞳を下してこの廣い野を見ると、其處にはや既に一種の狭苦しさが感ぜられた。私はとある小高い處から馳せ降つて他の小高い處へ移つて行つた。更に他の一つへ走つた。鶉がそのまるい姿を地面に現して、鋭く啼きながら飛んで行つた。あとからも立つのを見た。この見事な野原の端に出て来て、野を見、山を仰いだ私は、一



時まつたく茫然としてしまつた。そしてその時間が過ぎ去ると、更にまた新しい心で眼前の風景に對した。海中のうねりにさながらの野原のうねり、その無数のうねりをなす圓みを帯びた丘のうちで、どれが最もすぐれて且見事であるかを眼で調べ始めた。そしてやがて脱兎の如く最初に立つた一點から走り出した。

どの丘が一番高いといふことは、謂はゞ不可能のことであつた。眼分量で測つて認めた一つの高い丘へ駆け上つて見ると、更にまたそれより高い様な丘がその先にあつた。二つ三つを駆け廻つた後、私も諦めて或一つの丘の上にとつかりと身體を横たへてしまつた。柔かな草の上に仰向

けにころがると、富士は全く私の顔を覗きこむ様にして、眞上に近く聳えてゐるのであつた。そしてそこから正面に見える山腹に、刳つた様な、途方もない大きな崩壊の場所が見え、その崩れた下端に鳶の喙に似た恰好をして、不意に一箇所隆起してゐる所が見えた。即ち寶永山である。刳れた場所は或頃の噴火の痕で、その噴き出されたものが凝つて寶永山を成したものだといふ。遠くから見れば先づ一色に黒く見えるばかりであるが、決して唯の黒さではない。その中に綠青に似た青みを含み、薄く散らした斑な朱の色もそこらに吹出てゐる。黄も交り、



紫も見える。そして山全體にわたつて刻まれた細かな襞が、襞に宿る空の色が、更にそれらの色彩に或複雑と微妙とを現してゐるのである。富士山は唯遠くより望むべきもの、ことに雪のない頃は見るべからざるものといふ風に思つてゐた私の富士觀は、全く狂つてしまつた。要するに今日までは私は多く概念的にこの山を見てゐたのであつた。けふ始めて赤裸々なこの山と相接して、生きたものに似た親しさを覚え始めたのである。一種流行化した謂はゆる「富士登山」をも私は忌み嫌つて、今まで執拗にもこの山に登らなかつたが、かうなつて來るとその考も怪しくなつた。早速來年の夏はあの頂上まで登つて行きたいものだなど

と、鮮かに晴れた其の山を仰ぎながら微笑した。

（靜かなる旅をゆきつこ

柳澤淇園

大和郡山藩士

名は里恭

諸藝に通ず

寶曆八年(三四八)

歿す

二七 まことの愛

柳澤淇園

われ幼き頃より詩歌・文章の道を好み、稿成れば父に見せて、添削を乞ひけり。父は一つとして褒め給へることなくて、唯「無益の事なり」とて、座右に投捨て給ひぬ。さるに他の者の作れる文は褒め給へば、「さりとはいかゞ」とのみ思ひてすごしけり。

後に、妻に迎へたる女、物縫ふこと人に優れて、小袖など一日に一重ねづつ縫ひて、餘事までも事缺かず、その道の職人の



見ても驚くばかりに、上手なりけり。或時、われその物縫ふを見てめで賞しけるに、妻のいひけるは、「わらは二歳にして母をうしなひ、繼母に育てられしが、繼母はわらはの五六歳の頃より水仕の業を勤めさせ、七歳の頃より手習、讀物、裁縫を教へ給ひ、『實の子ならねば教訓足らずと、末にいたりてそしられんは口惜しかるべし。』とて、教へ習はしめ給ひければ、羽根突く遊だにえせざりき。折柄には、厳しき母よと思ひしこともありしかど、今となりてかく人にほめらるゝは、偏に繼母の情によれり。」といひけり。

われ聞きて、始めて、予が幼き頃の作文を褒められざりし事の、いとも有難かりしを思ひ合せぬ。(雲萍雜志)

二八 蜘蛛と蠅

坪内逍遙

坪内逍遙  
名は雄藏  
英文學者  
劇作家  
早稻田大學名譽  
教授

ある大きな座敷の中を大きな蠅と小さい蠅とが飛び廻つてゐる。大きなのが親で、小さいのが子である。

母蠅　　ブズブズブズブズ！　　ブズブズブズブズ！

蠅子　　(うれしさに飛び廻つて)　　うれしいな〜！　　わたいう

こんなにな大きくなつた！　　もうどこへでも飛んでい  
かれるは。　　ねえ、かあちゃん、あつちへ飛んでつてもい  
い？

母蠅　　あゝいゝよ。　　けれどもこはい蜘蛛があるからね、つか  
まつちやいけないよ。

蠅子　　蜘蛛つて？　　なあに蜘蛛つてのは？



母 蠅 お前まだ知らないの？ 蜘蛛つてのはね、大きな、こはいこはい化物なのよ。わたしらを捕つてたべるの。目が八つあつて脚が八本あつてさうして口が四つにも裂けてゐて、それで以てお前たちに噛みついてがぶりと呑んぢまふの。

蠅子 おゝこはい！ ぢや、わたい蜘蛛なんかゐないところへいかうや。

母 蠅 それがいゝよ。氣をつけておいで。だがどこへいくの、お前は？

蠅子 わたいどこへもくゝいきたいの。ぐるぐるどこもかも飛んであるきたいの。ぢや、かあちゃん、いつてく

るよ。 さよなら。

一方へ飛びながら入る。

母 蠅 さよなら。氣をつけておいでよ。蜘蛛につかまつちやいけないよ。……これから臺所へいつて来よう。おいしいにほひがしてゐるから、なにかいゝ物があるだらう。けれども女中が蠅叩きを持つて睨んでゐるから、うつかりするとけんのんだは。そつと飛んでいきませう。

と蠅子の入つた方とは反對の方へ入る。と蠅子の入つた方から蜘蛛が出て来る。

蜘蛛 つい今こゝに、蠅が二三匹ゐたやうだつたが、どこへいつたらう？ 薄暗いからこゝに巢を掛けといたら、す



ぐに一匹や二匹はつかまるだらう。すぐ掛けはじめませう。……これから巢をかける真似をする。まづ一等太いのをこつちから一筋……それから又こつちからこつちへ一筋。さ、これで大きな十文字が出来た。それからこれを土臺にして、今度はこの真中からまづ一筋こつちへ！……又一筋そつちへ！（あつちへ往つたり、こつちへ往つたりする。）それから又こつちへ！それから又そつちへ！又こつちへ！又そつちへ！……さあこれからはこの周圍まわりへ大きな輪をこしらへるんだ。さ、ぐるぐるつ！（と廣くあるき廻る。）ぐるぐるつ！ぐるつ！ぐるつ！……あ、やつと

巢が出来た。こゝいらに構へて待つてゐよう。蠅の奴がもう來さうなもんだ。……おや！來たらしいぞ。あ、あんな小さい奴が來た。

前とは反對の方から蠅子が戻つて來る。

蠅子

ブズブズブズブズ！

蜘蛛

あ、來たく！……呼んで見よう。……もしく、蠅さん

蠅子

どこから來たんです！

蜘蛛

だあれ、わたしを呼んだのは？

蠅子

わたしです。お散歩ですか？ おくたびれでせう。

この上んとここにいゝお座敷がありますよ。御案内致しますから、あがつてお休みなさい。



蠅子

(翼を休めて、じつと見てゐたが)ありがたう。まだくたびれま

蜘蛛

せんから。(横をむいて)きつとあれが蜘蛛だよ。二階か

蠅子

らは、きれいな景色が見えますよ。  
いゝえ、ありがたう。(横をむいて)こはいは。あれは蜘蛛

蜘蛛

らしいから。  
ねえおあがりなさいよ。お腹がすいてませう。あの  
二階にはいろんなおいしいものがありますよ。ねえ、  
何でもあなたにあげますから、おあがりなさいよ。

蠅子

ありがたう。……(横をむいて)ま、大變に親切なこと！あ  
んなことをいふもんだからお腹がすいて來たは。何

かたべたくなつたは。けども、蜘蛛かも知れないから

こはいは。

蜘蛛

ねえ、いらつしやいよ。いゝものをあげますから。

(蜘蛛は始終巢の中から物をいつてゐるつもり)

蠅子

ありがたう。でもね、あなたの前には網のやうな物が  
掛つてゐて顔がよく見えないからこはいは。

蜘蛛

ぢや、もつとこつちへ寄つて來て御覽なさい。……(自分  
も進んで)そら見えるでせう、わたしの顔が。(蠅子の顔を見

て)ほんとにあなたは、大きなぴか／＼光るいゝお目を

持つておいでゝすね。さうして、まあ、そのお翼の綺麗

なこと！



蠅子

と女のやうなやさしい聲でいふ。  
〔横をむいて〕女のやうに優しい聲だ。あんなにやさしいから、蜘蛛ぢやあるまい。もつと傍へいきませう。

と蜘蛛のそばへ進みかけたが、また立ちどまる。蜘蛛は頻に手招きする。蠅子は何度も行きかけては立ちどまる。この時母親の蠅が急いで飛んで出る。

母蠅

あゝこはかつた！ すんでに女中にぴつしやりとぶたれるところだつた。あゝ、まあ、よかつた。……それはさうと蠅子はどこへいつたらう？ 蜘蛛の巢の近邊へでもいきやしないか知ら！ 呼んで見よう。蠅子や！ ブズズズズ！ 蠅子や！ ブズズズズ！

母蠅は蠅子のゐるところとは反対側を飛びまはつてゐる。

女中

ほんとにしやうがないは。やつと臺所から追つぱらつたと思つたら、もうこゝへ来てブズズ〜いつてゐるは。……しゆつ！ しゆつ！

蠅子は母蠅の聲を聞いて戻らうとする。此の時女中が箒を持つて出て来る。

と箒で拂ふ。

これで蠅子が驚いて逃げる拍子に蜘蛛の巢に掛る。

蠅子

あゝ、しまつた！ 手や足に何やら掛かつたあ！ 逃

げられない。どうしよう〜！

蜘蛛

しめた！ さあ、しめた！ 逃しやしないぞ。

蠅子

ブズズズ！ 助けてくれい！ 助けてくれい！ ブズズズズズズ！

二八

蜘蛛と蠅



女中 おや！ けさ掃除をしたばかりなのに、もうこんな大きな蜘蛛の巣がかゝつてるよ。にくらしいね。叩き落してやりませう。

蜘蛛 さ、大變だ！ 女中に見つかった。こりや大變だ。早くどこか。

蜘蛛がうろく／＼してゐるうちに、女中は箒を振りあげて巢を横に拂ふ。蠅子は巢からころげ落ちる。蜘蛛はあわてゝ逃げる。

母蠅が飛んで来て、蠅子を抱き起す。

母蠅 蠅子や／＼！ まだ生きてたかい？ 助つたかい！ 返辭をおし、返辭を！

蠅子 かあちゃん、こはかつたよ／＼！

母蠅 まあ、よかつた。 さあ／＼お祝に一つ歌ひませう。 歌ひませう。

蠅子 (二しよに) ブズズズズズズ！ ブズズズズズズズズ！  
と音楽になる。二人は踊るやうに飛び廻る。

女中 おや！ 又來たよ！ にくいやつめ！ しゆつ！ しゆつ！ しゆつ！

蠅の親子は女中に箒で追はれつゝ逃げて入る。

(家庭用兒童劇)



昭和三年二月二日  
 文部省檢定  
 高等女子學校國語科用

昭昭和昭  
 和和和和  
 二二二二  
 年年年年  
 九九一  
 月月月  
 廿廿廿  
 五五五  
 八八八  
 日日日  
 印發日  
 訂正日  
 再版日  
 印刷日  
 發行日

新定女子國文

【全十冊】

昭 三 年 度	昭 三 年 度	昭 三 年 度	昭 三 年 度
卷 一	卷 二	卷 三、 四、 五、 六、 七	卷 八、 九、 十
金 拾 五 錢	金 拾 五 錢	金 拾 五 錢	金 拾 三 錢

定 價	卷 一、 三、 四、 十	卷 二、 五、 六、 七	卷 八、 九
金 四 十 錢	金 三 十 九 錢	金 三 十 七 錢	金 三 十 八 錢

不  
許  
複  
製

著  
者  
吉  
田  
彌  
平

發  
行  
者  
東  
京  
市  
神  
田  
區  
美  
土  
代  
町  
三  
丁  
目  
一  
番  
地  
金  
港  
堂  
書  
籍  
株  
式  
會  
社

代  
表  
者  
原  
安  
三  
郎

印  
刷  
所  
東  
京  
市  
牛  
込  
區  
榎  
町  
七  
番  
地  
日  
清  
印  
刷  
株  
式  
會  
社

發  
賣  
所

東  
京  
市  
神  
田  
區  
美  
土  
代  
町  
三  
ノ  
一

振  
替  
貯  
金  
口  
座  
東  
京  
八  
八  
一  
五  
番

金  
港  
堂  
書  
籍  
株  
式  
會  
社

新定女子國文卷一

1911

新定女子國文卷一終



